

第41図 8-5 トレンチ西壁土層断面図

五輪塔片の採集地点では、中世期の土器が少量出土したものの墓地確定には至らなかった。ただし五輪塔片が採集されている以上、墓地としての可能性は多分に考えられる。

e. H12-5 調査区 8-19~27 トレンチ (図版17・30、写真図版41・42)

白川谷の南端部である。現在は大半が休耕田であるが、大小様々の棚田が数多く展開する。トレンチはその中で比較的大きな平坦面を中心に計9カ所設定した。いずれも雛段造成で下段へいくに従って厚く盛土造成されていた。遺物の大半は床土内から出土し、14~15世紀の室町時代を中心とするものであった。無遺構で、平坦面は中世期に耕作地として開墾されたものと判断した。

小結 当初目的であった寺域の北限・南限について調査成果をもとに整理する。

まず北限からであるが、現風景の原形は近世期に成立したもので、その造成は主に耕作地の確保のためと理解された。近世以前ではH12-3 調査区が中世期に開墾されている。調査が小規模でその性格は判然としないが、坊院の存在も十分あり得る。

次は寺域の南限である。調査区を白川谷南端までを含む比較的大きな範囲で設定した。現地地形から判断して谷の最南端部にあたるH12-5 調査区より南方へは広がることはない判断した。南端部は小規模な棚田が数多く展開する。いずれのトレンチも遺構は検出されず、中世期の遺物が少量出土するのみであった。細片が多く年代の詳細は困難だが、判別できるものから概ね室町時代ごろと想定された。遺物の出土状況や小規模な平坦面から水田や茶畑などの耕作を主目的に造成されたものと理解された。なおこの地域においても坊院跡が想定される大きな平坦面が1カ所ある。茶畑として使用され、直接はうかがい知れないが、周辺部の調査地から、中世期の遺物が出土している。

以上のことから寺域の北限は中世坊院跡が予測されるH12-3 調査区まで、寺域の南限も北限同様に中世坊院跡が予測される茶畑付近とその南側の地形変換点までを寺域の範囲として理解しておきたい。

1. 平成13年度（第9次調査）

平成13年度の発掘調査目的は、寺域の西限を確定することである。調査区を計4カ所設定した。

a. H13-1 調査区9-1～3 トレンチ（図版17・33、写真図版45）

トレンチは計3カ所設定した。調査区は段丘崖直上の東西に細長い上下2段の平坦部である。調査の結果、調査区は江戸時代に小さな谷を埋めて造成し、耕作地として利用したことが理解された。東の段丘崖へ近づく程、盛土が多く旧地形は東から西への急斜面状であったと理解した。盛土内から平安時代後期の軒平瓦1点と中世の土器片が若干出土した。いずれも磨滅度が少ないことから付近からの流入が考えられ、北隣りに坊院跡が想定される平坦面があることや、地形的にみていくと北側からの流入と考えるのが妥当と判断した。

b. H13-2 調査区9-4～6 トレンチ（図版17・33、写真図版45）

トレンチは計3カ所設定した。段丘崖直下の平坦地である。周囲の地形から東側と南側を一部削っている状況が理解された。段丘崖下にあたる西側は、南北に細長い谷筋が入り、そのほぼ中央を南から北の宇治川に向かって蛇行しながら一すじの川が流れている。この地区の名の由来ともいわれる白川である。現在白川は暗渠となり、その川筋は舗装された道路となり白川地区の主要道路となっている。この道路の両側に住宅が立ち並び、白川地域の町並みが展開する。調査区はその一角で唯一の空閑地である。表土を掘削し除去するとすぐに黄褐色土の地山層が確認された。この地山を掘り込んで近代の攪乱層が数カ所で確認された。無遺物。状況的には調査区平坦地の造成は近代以降と判断した。

c. H13-3 調査区9-7～9 トレンチ（図版17・31・32、写真図版43・44）

トレンチは計3カ所設定した。白川に東接する平坦地で、段丘崖が後の宅地造成によって判然としないところである。調査の結果、いずれのトレンチからも南北方向の溝が検出された。溝の堆積状況及びその位置関係から、同一のもの（SD9701=SD9801=SD9901）と理解された。周囲地形を詳細にみると段丘崖は調査区に西接してかつては存在していたことがうかがえ、この一連の溝は、段丘崖直下を沿うように南から北に向かって流れる小川状のものであろうと理解した。溝の西肩部は粘土で叩きしめられており、人為的な痕跡がうかがえた。その範囲は溝西肩部から西側約1mにかけてで比較的固くそして平坦面を形成していた。現段階では小川の土手に設けられた歩道を想定したい。溝の埋土は大きく2層の腐植堆積層よりなり、下層で13世紀の土師器を一部含むが上・下層ともに16世紀を主とする遺物が出土した。遺物の残存状態から近隣よりの廃棄と考えられた。9-8トレンチでは時期は不明だが溝を埋め立て版築状に堅くつきかためた後に何らかの工事に伴う造成が行われていたと理解された。

d. H13-4 調査区9-10～15 トレンチ（図版17、写真図版46）

トレンチは計6カ所設定した。踏査によって平坦地が4カ所確認されたところである。調査前は樹木が繁茂する状況であった。調査の結果、明確な遺構は検出されなかったが、遺物が若干出土した。いずれも包含層出土で、鎌倉時代から江戸時代までの遺物を含む。西隣りの寺中心域からの流入品と思われる。

小結 平成13年度の発掘調査目的は寺域の西限を確認することであった。H13-1・2調査区によって寺域の西限は発掘以前に想定していた段丘崖がそのメルクマールとして妥当であり、この段丘崖を境界線としてその崖面上すなわち東方域にあたる場所は白川金色院の中心域として展開していくものと理解された。白川金色院跡の門口として単独で立つ惣門がまさしくその境界線上に立地しているのはその傍証ともなろう。H13-3調査区では段丘崖下を沿うようにして南から北へ流れる小川を想定させる南北の溝が検出された。溝内から16世紀代の遺物が主として出土しており、それらは大型の遺物においても残存率が高いものが多く、また磨滅がほとんどみられないことなどからみて、近隣からの廃棄が高い。周辺部の地形との関係でみれば、東側より廃棄されたとみた方が無難であろう。調査区東隣りには、南北方向に細長い比較的大規模な3段の平坦面がある。それらの平坦面には現在住宅と地藏院が併存する。地藏院創立がどの時期まで溯れるかは判然としないが、「久世郡寺院明細帳」によれば16世紀中ごろにはその名がみえる。この地藏院をも含むこれらの平坦面は、地形を大きく改変する程の造成であったことが周辺の地形からうかがえる。出土遺物の年代・造成の規模などから地藏院創立に伴う土地改変であったと考えておきたい。

J. 平成14年度（第10次調査）

最終年度である平成14年度発掘調査の主目的は、寺域の東限を確定することである。調査区は計5カ所を設定した。いずれも山間部である。

a. H14-1 調査区10-1～6 トレンチ（図版17・34、写真図版47）

トレンチは計6カ所を設定した。調査区南側の丘陵は、地元で「カグラボウ」と呼ぶところではほぼ東西方向に丘陵頂部が細長く続く。ここでは計3カ所のトレンチを設定した。表土・旧耕作土を除去すると現地表面下約0.4mで地山が検出された。遺物はわずかに出土したが時期は不明である。遺構も検出されなかった。また調査区北側の北丘陵でも同様の結果であった。いずれも耕作地として昭和前半まで使われていた。

b. H14-2 調査区10-7～9 トレンチ（図版17・34、写真図版47）

トレンチは計3カ所を設定した。調査区は、盆地からH14-1調査区へと通ずる山道の途中にある。西方向にやや傾斜しているものの概ね平坦面となっているところである。調査の結果、表土及び耕作土を除去するとすぐに黄褐色の地山層が確認された。現地表面下0.3～0.5mである。無遺構・無遺物であった。

c. H14-3 調査区10-10・11 トレンチ（図版17・34、写真図版47）

トレンチは計2カ所を設定した。いずれも山頂部で狭い平坦地となっているところである。北側山頂部の西側、やや斜面地を降りたところに巨大な岩が二つに割れた状態で存在する。平成11年度調査した上林清泉の『白山宮之図』にみえる夫婦岩である。調査の結果、いずれのトレンチも表土は薄く、それらを除去すると風化の著しい岩盤が検出された。無遺構・無遺物であった。

d. H14-4 調査区10-12・13 トレンチ（図版17・34、写真図版47）

トレンチは計2カ所を設定した。調査区は白山神社へ上がる階段下の南側から山間部と通じる旧

道沿いに位置する。この旧道は、別山裏の裾を通過して寺川の西側に沿って上明へと続く舗装道路ができるまでは、白川盆地から宇治田原方面へゆく主要道の一つであった。古くは江戸時代まで溯るようだ。調査前は廃道に近い状態となっていた。調査区は白山神社から徒歩約10分のところで、谷あいを雛段造成して作り出したと考えられる上下2段の比較的広い平坦面である。各それぞれにトレンチを設定した。いずれも表土及び旧耕作土と考えられる灰色土を除去すると、すぐに灰褐色の地山層が確認された。現地表面下約0.3mである。断割を実施し、造成に伴う地山削り出しの土が若干認められた。遺物は若干出土したが、いずれも近代のものである。造成は近代の耕作に伴うものと理解された。

e. H14-5 調査区10-14~16トレンチ (図版17・34、写真図版47)

トレンチは計3カ所を設定した。山頂部は平面瓢箪形の広い平坦面状となっている。地元では記紀にみられる応神天皇の皇子ウジノワキノイラツコ「菟道稚郎子」の墓と言い伝えられてきたところである。標高約150mの白川盆地周囲の丘陵中最も高い地点で、盆地西側の標高約100mの低丘陵を越えて宇治方面(平野部)を一望することができる。山頂までは急斜面である。いずれも厚く堆積した表土層を除去すると、黄褐色の地山層が確認された。現地表面下0.4~0.6mである。無遺構・無遺物であった。

小結 いずれの調査区からも顕著な遺構・遺物は出土せず、寺院に関連した常置的な施設の存在は認められなかった。白川金色院では、基本的に山間部の施設をもたなかったと考えられる。なお寺院とは直接関係はないが、対象にした山間部での調査区では北と南それぞれの土地利用のあり方が異なることが明らかになった。北部はその大半が耕作土であり、耕作地として利用されていた。南部では、H14-3 調査区以外は耕作地の痕跡は認められなかった。また踏査でも耕作地として指摘できる場所も見受けられなかった。かつて当該の南部山間地区ではまつたけが多く採取されたことから、おそらく植林を主とする土地利用がなされていたと考えられる。それらの土地利用のあり方がどの時期まで溯るかは判然としないものの、興味深い。今回調査対象とした山間部は、対象が広範囲にわたり、調査した面積も狭いため、どの程度実態を把握できたかは、はなはだ疑問である。今回の調査の場合、踏査を中心に広範囲を歩いたつもりだが、山間部を通過していた道の大半はすでに廃道となり、一定のメルクマールともなるようなものもない状態であった。山間部における寺院の実態を認識するには考古学的手法では限界があることを十分踏まえなければならない。山岳修験の場といったような修行的空間となると、遺物は基本的には出土しないことも十分あり、また遺構もその判別は難しい。その寺がもつ性格も含め、より総合的に広範囲に目を配り理解していく必要性があろう。白川金色院の場合、平等院を中心とするいわゆる宇治地域の空間認識と、地域的にはさらなる詳細な分布踏査と文化財全般にわたる調査が必要であろう。ほかの類例寺院との比較検討も含めた総合的学術的視点に基づく調査は、次のステップとして今後進めていかなければならない作業である。

V 出土遺物

この10年間にわたる発掘調査で出土した遺物量は、コンテナ箱に整理した結果、約70箱となった。決して多い量とはいえないが、遺物の種類・時期は多岐にわたる。平安後期に創建されてから明治初期の廃仏毀釈による廃絶段階までの700年余り続いた白川金色院の通史の変遷、及び各時代における寺の概要を知るには比較的十分な情報量が提供できたと考えられる。

基本的には遺物の種類ごとにその内容を述べていくが、H9-5調査区5-5トレンチの経塚関連遺物と礎石建物SB3401の地鎮関連遺物については、いずれも一括遺物として別に記述した。また白川金色院創建前の遺物も若干ながら出土しており、これも別に記述した。各遺物の出土トレンチは巻末に一覧表で示した。以下、各遺物の概要を述べていく。

1. 瓦 (第42・43図、図版35~39、写真図版48~53)

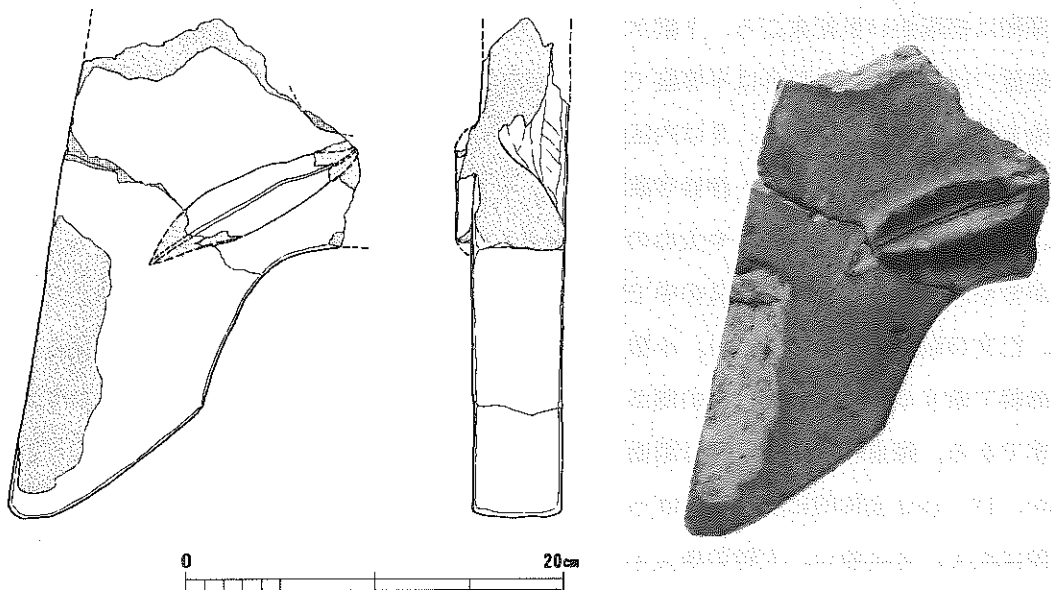
コンテナ箱にまとめて約40箱分の出土量である。平瓦・丸瓦が大半を占めるが十分整理しきれていないため、他種類の瓦についてみていく。数量は少ないものの、平安後期(創建期)から江戸後期まではほぼ連続的にみることができる。軒瓦の年代観は、他の寺院・遺跡との照合によって年代を推定できる軒平瓦を基準として、出土軒瓦全体の様相及び出土状況とを鑑みながら整理した。

A. 軒丸瓦 (図版35・36・39、写真図版48~50・53)

総出土数は46点である。1~8は複弁六葉蓮華文を主文とし、中房に二巴文を配する。子葉に圏線をもち弁が接するもの(1~4)と、子葉に圏線がなく弁どうしが離れているもの(5~8)とに大別できる。前者が古相を示す。平等院では康和3年(1101)の氏長者藤原忠実修理の沙汰による修理瓦に位置づけられる。生産地は大阪府八尾市(旧河内国高安郡)の向山瓦窯で、その操業期間は初現が11世紀末ごろ、下限が12世紀中ごろに今のところ比定される。白川金色院創建瓦に位置づけられる。3以外は平等院で同范が確認できる。宇治地域では度々出土し、平安後期の宇治を特徴づける瓦である。9は内区に4条の圏線を巡らし、外区内縁に珠文、外縁に1条の圏線を巡らす。同文は平等院・浄妙寺跡にある。平安後期。10~22・53~55は巴文を内区主文とする。10は珠文の外に1条のやや太めの圏線を巡らす。巴文の頭は比較的丸く、尾は長い。文様全体がやや太く丸みを持ち、巴文の中でも古相を示している。鎌倉前期か。12・13は巴文のみである。巴文の頭は尖り、尾は長い。小型瓦。鎌倉前期。11・14・15は巴文と珠文との間を1条の細い圏線で画する。11・15は巴文の頭がやや尖り、尾は長く圏線にとりつく。珠文はいずれも小さく密である。鎌倉時代。16・17は断面三角形となる巴文を配し、大粒の珠文を巡らす。室町後期か。18・19は全体的に文様が厚ぼったい瓦である。巴文の頭は丸い。室町後期。20~22は巴文の頭は丸く、尾は短い。大粒の珠文を巡らす。江戸中期か。53~55も20~22と類似するが、中房直径が小さい。江戸後期。56は菊花状の文様を表現する。江戸後期。以上のうち、二次焼成を受けて赤変化しているのは4・8・9・14・56である。

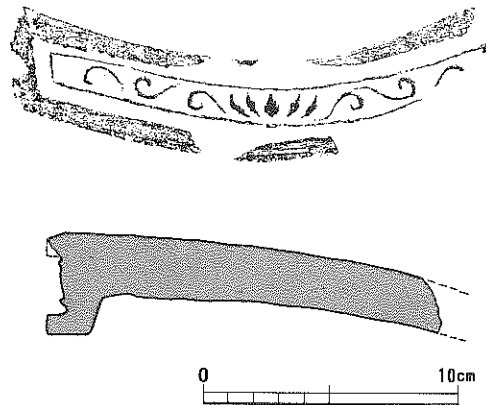
B. 軒平瓦 (図版37~39、写真図版51~53)

総出土数は39点である。23~29は中心飾に雪達磨状の花頭文様を置き、左右に唐草文を展開させる。23は1条の圈線を巡らす。23・24は唐草文に子葉を配する。27~29は外区が重圈文状となる。現在認識される河内向山系軒平瓦の諸特徴は、浅い段顎で、凹面に布目痕、凸面に細い縄の叩き痕がみられるものである。以上を踏まえると23以外は河内向山系となる。これらは前述創建期軒丸瓦とのセット関係をなす。23は異なり、深い段顎で凸面はケズリ調整である。23・27の同范が平等院で確認できる。30・31は唐草文の巻きがきつく、その先端部に2枚の花弁状のものを配する。凹面に細かい布目痕、凸面に離れ砂が付着する。同文が川原寺・橋寺にある。類例は元興寺極楽坊・栢森遺跡・釈恩寺・東大寺・東福寺等にみられる。鎌倉前期。32は中心飾が上向きC字形の唐草文で左右に巻きの強い唐草文が展開する。34・35はその系譜上にある。32は凹面に細かい布目痕、凸面には縦方向のケズリを施す。瓦当裏面に凹形台の痕跡が残る。東福寺に同范瓦が確認される。鎌倉中期か。34・35は凹面に細かい布目痕、凸面に離れ砂が付着する。34は瓦当裏面に凹形台の痕跡が残る。小型瓦。これらは軒丸瓦12・13とのセット関係が考えられる。32と同じく鎌倉中期か。33は中心飾に半裁花文を上下逆に配し、左右に唐草文を展開させる。瓦当貼付け技法。胎土は粗く、長石を多く含む。平等院と同范である。鎌倉中期。36・37は中心飾不明で、唐草文が展開する。顎の形状・唐草文の表現等から36は鎌倉中~後期、37は室町前期を想定する。38・39は中心飾がなく、中心から左右ほぼ対称に唐草文が展開していく。凹面に布目痕、凸面は基本的に縦方向のケズリである。瓦当裏面に凹型台の痕跡が残る。瓦当貼り付け技法の可能性が高い。室町前期か。40~43は中心飾不明で唐草文が展開する。41~43は顎貼り付け技法である。室町後期後半。44~47は同一文様で、大小2種類に分けられる。文様の簡略化が著しい。顎貼り付け技法で、接合面にカキメを施す。46・47の凸面にはヘラ工具で籠目状の刻みを入れて



第42図 鬼瓦実測図・写真

いる。滑り止め用か。44・45は軒丸瓦18・19とセット関係をなす。室町後期後半。48は唐草文が大きく巻き込む。瓦当貼り付け技法。49は雲状文に唐草文が変容したものである。中心飾は剣菱状文様か。瓦当貼り付け技法で、接合面にカキメを施す。50はそれが抽象化されたものである。平等院に同范が確認される。48～50は江戸前期。51は一般的に橘唐草文が流布するその前段階とも考えられる文様構成をとる。瓦当貼り付け技法。宇治郷乙方在住瓦屋山田源左衛門製である。江戸前期。なお惣門前に立つ石燈籠（弘化三年〔1846〕銘）の基壇3段目に陰刻された寄進者名の中にも、「瓦屋源左エ門」すな



第43図 昭和57年度概報掲載軒平瓦実測図

わちこの山田源左衛門の名がうかがえる。57は橘唐草文である。文様部分は極めて狭い。江戸後期。その他図化していないが、57よりも新相の橘唐草文が2種類出土している。いずれも瓦当貼り付け技法である。以上のうち二次焼成を受け赤変しているのは29・34・37・38・41～43である。

なお昭和57年度概報掲載資料に、今回の発掘調査で出土していない軒平瓦（第43図）がある。中心飾は退化した半裁花文で、3反転する唐草文を配し、その周囲を1条の圏線が巡る。凹面には布目痕、凸面には離れ砂が付着し部分的にナデが入る。青灰色。硬質。室町後期。

C. 軒棧瓦（図版38・39、写真図版53）

総出土数は10点である。52は唐草文を2重線状で表現したものであり、外縁を面取りする。江戸中期以降。58～61は橘唐草文もしくはそれから派生した文様構成のものである。60・61は中心飾に「水」のくずし字を置く。江戸中期後半以降。前述の山田源左衛門瓦を想定。

D. 鬼瓦（第42図）

左下半部のみ残る。裏面は削り込み、その後ナデで仕上げる。文様は桃か宝珠かのいずれかであるが、残る葉文の形状から前者を想定したい。江戸時代。また関伽井跡で外区に竹管文状で表現された大粒の珠文を巡らし、内区文様が福槌と考えられる破片が3点出土している。江戸後期。

2. 土器（図版40～45、写真図版54～61）

A. 土師器・土師質土器（図版40～42、写真図版54～56）

1～34は1-1トレンチSK1103出土の一括遺物である。淡赤褐色系の1～23と、灰白色系統の24～34の2種類がある。1～8は口径7.0～8.0cm前後で、扁平な形状のもの。底部を一方にナデたのち、体部をヨコナデする手法は京都産土師器と同一である。概して口縁部外面はしっかりナデられているが、内面のナデは非常に不明瞭である。6～8は器壁が2～3mmとほかより薄手につくられている。9～19は口径8.0cm前後の皿。こちらもナデは弱い。胎土の質にもばらつきがあり、9・13～15は砂粒を多く含む粗い粘土で作られている。12は内面が渦状にくぼんでおり、粘土を巻き上げて成形したことがわかる。17は面取りをかけたように端部がとがる。19は砂

粒の多い胎土で、口縁部がつよく外反する。20は口径8.4cmをはかる。ナデは不明瞭で、口径は歪みが大きい。21～23は口径11.0cm前後の皿。21・22は底径が大きく、短い体部がやや外反しながらたちあがる器形で、21は見込み部分にドーナツ状に煤が付着する。23は口縁部がつよく外反するタイプ。底部外面にはスノコ状圧痕をのこす。胎土は砂粒を多く含む。24・25は口径8.0cm前後で、体部が短く扁平な器形である。24は口縁部の1/2程度に煤が付着する。25は円盤型に成形したのち、端部を折り曲げて皿形に整える。京都産土師器にはみられない手法である。26～31は口径7.0cm前後の小皿。器高は約1.8cmと比較的高い。26・27は底部外面全体がくぼむ。32～34は口径11.0cm程度で深身の器形。器壁も2mm前後と薄い。

以上の土器群はナデなどの整形技法、色調の分化という点でいずれも京都産土師器と共通するものの、26～34をのぞく大半の土師器は器形が異なっている。26～34など京都産土師器に類似した資料を手がかりとするならば、14世紀末ごろと考えられる。なお以上のうち、煤が口縁部などに付着し、灯明皿と考えられるのは3・12・13・22・24・25であった。

35～41は3－4トレンチから出土(36・38・39については後述)。35は口縁部に2段ナデがつよく施されている。37も同様だが、こちらはナデが不明瞭である。40は器壁が3mm前後と比較的薄い。口縁部に煤が付着。いずれも淡褐色。41は橙褐色で、工具を用いて見込みに圏線がつけられる。口縁部に煤が付着。41は16世紀末、それ以外は12世紀後半ごろのものである。

42・43は4－1トレンチより出土。42はいわゆるコースター状の皿である。淡茶褐色。口縁部の屈曲は丁寧でなく、12世紀末ごろであろう。43は口径10.0cm前後の皿。摩耗が著しく、調整は確認しがたいが、器形からみれば15世紀代に位置づけられる。口縁部に1カ所煤が付着する。

44～48は4－3トレンチ平安期基盤層上面から出土した口径9.0～10.0cm前後の皿。淡黄茶褐色で、いずれも2段ナデを口縁部外面に施す。46のナデはつよく、上段部には凹線がのこっており、工具を用いたものと推測される。口縁部に煤が付着。これらは地鎮関連遺構群の資料とほとんどおなじ様相であり、12世紀初頭から前半と考えられる。

49・50は4－4トレンチ出土。いずれも淡褐色で、口縁部は1段ナデ。49の口縁部には数カ所煤が付着する。13世紀後半ごろ。

51～56は4－6トレンチSD4608より出土した。51は口径13.0cm前後の大皿である。淡褐色で、器壁は5mm前後とやや厚い。口縁部に1段ナデを施す。52は口径6.0cmを測る小皿。内面は時計回りにヨコナデしたのちナデ上げる。53・54は口径7.0～8.0cmのへそ皿。暗茶色を呈する。55は口縁部上半がつよく外反するタイプの皿。15世紀代によくみられる器形である。口径7.0cm前後で、口縁部に1カ所煤が付着する。56は器壁が3mm前後と比較的薄手につくられた皿。52～56はいずれも2次的な火熱を受けている。51は13世紀後半から14世紀のものだが、それ以外は15世紀中ごろに位置づけられる。SX4608は焼土を含んだ遺構で、堂宇の焼亡年代を知る手がかりになる。

57～66は6－3トレンチ柱穴群からの出土。いずれも淡褐色～淡茶褐色を呈する。口径9.0～10.0cmの小皿が多い。57・59は2段ナデのもの。内外面のナデは丁寧である。58は口縁部を面取りする。面取りの工具は水平方向からあてられる。60も1段ナデののち端部を面取りするが、非

常に粗雑である。61は淡赤褐色の皿。ナデ調整は非常に弱い。体部外面に粘土の接合痕がのこる。帯状の粘土を巻き上げるようにして成形されている。62は短い体部が直線的にたちあがる扁平な器形である。63も口縁部を1段ナデ面取りする皿。胎土は粗く、ナデも粗雑に施される。64～66は1段ナデの皿。65・66は口径13.0cm前後を測る大皿で、前者は62と同様、体部の短いタイプである。66は器高が2.4cmとやや深く、胎土は砂粒を多く含む。

67～73は6-3トレンチ黄褐色粘質土層から出土した。67・69は非常にナデが弱く施されるが、口縁部を2段ナデする。淡乳褐色で、赤色粒を含む胎土である。68・70は淡赤褐色で、口縁部を1段ナデするタイプである。71も1段ナデであるが、口縁部外面をハケ状工具を用いてナデしており、表面に細かい条線がのこる。宇治市域では例のない手法である。胎土は砂粒を多く含む。72・73は体部がゆるやかにたちあがり外反する。これらは15世紀末～16世紀初頭ごろのものであるが、それ以外の資料(57～71)は、おおむね12世紀後半から13世紀前半のものである。

74～77・79・80は6-6トレンチ焼土層より出土。74は淡赤褐色で口縁部を1段ナデする。器厚は5mmを越えており、やや厚手の部類に入る。75は口縁部下半がとくにつよくナデられているため凹凸が生じているが、1段ナデに含まれる。体部外面に跋行するかたちで粘土の接合痕がのこる。いずれも口径9.0cm前後の小皿である。76は砂粒や赤色粒をきわめて多く含む胎土である。ナデも弱く、調整はほとんど観察できない。77は口径10.0cmで、口縁部を2段ナデする。淡褐色で、底部中央を外から指先で軽く押しくぼめている。79は口径13.8cmの大皿。口縁部は1段ナデで、器高が高い。2次的な火熱を受けており、淡桃色に変色している。口縁部1/8程度に煤が付着し、内面にも茶褐色の物質(油か)が付着する。80は口径14.0cm超の大皿。淡黄褐色で、身は深い。口縁部を2段にナデるが、大変弱く痕跡は不明瞭で、2段ナデの通有の器形とはかなり異なる。78・81は集石遺構から出土した。78は口径12.0cm弱で、口縁部を2段ナデする。口縁部1/4程度に煤が付着する。淡褐色。81は台付き皿の脚部。粘土で筒状の脚部をつくったのち、一方に入れた切り込みを内側に曲げて(はりしろとする)皿に接合している。接合部の外面には5mm大の指頭圧痕(工具痕?)が明瞭にのこる。皿部の見込み部分には全面煤が付着する。橙褐色。以上の多くは京都産土師器の器形を忠実に模倣しているとはいえないが、おおむね12世紀後半から13世紀前半ごろの年代とみて大過あるまい。

82～84は黄褐色粘質土層から出土。82は74と類似する器形で、口縁部を1段ナデする。83は内面を時計回りにヨコナデし、口縁部のほうへナデ抜くが、外面にはナデ調整を施さない。84は淡赤褐色で精良な胎土。口径14.1cmを測る。口縁部を1段ナデする。13世紀後半代か。

85～87は茶灰色粘質土層から出土。85は1段ナデの皿。口縁部外面のナデの境界がつよく意識される。86は口径14.1cm、87は口径18.0cmの大皿。淡黄褐色で、砂粒を含むざらつきのある胎土である。いずれも2段ナデで、底部中央がくぼむ。12世紀後半ごろの製品であろう。

88～104は6-8トレンチより出土した。88は淡赤褐色のへそ皿。底部を小指の先で押しくぼめ、端部をつまみあげる。89～92は口径7.0cm前後の小皿。いずれも淡赤褐色系統の色調を呈する。体部はつよく外反し、下半には指頭圧痕がのこる。89・90は2次的火熱を受けており、灰桃色に

変色している。91は口縁部1/2程度にひろく煤が付着する。93は口径9.0cmの皿。底部を一方向ナデしたのち、体部を時計回りにナデて斜めにナデ上げる。淡赤褐色。94~104は逆台形の側面観をもつ器形である。口径は11.0~16.0cm前後と幅がある。94は内面に煤が付着。体部のヨコナデはハケ状工具が用いられる。95も煤と油状の物質が口縁部2カ所に付着する。96は暗茶褐色で、見込みに煤がわずかに付着。97は淡橙色で、口縁部外面のナデには細かい条線がみられる。ハケ状工具を使用。98は器高3.0cmと深身である。淡黄灰色で、15世紀初頭ごろのものであろう。99は内外面を丁寧にナデる。口縁部内面はヨコナデしたのち、垂直にナデ上げる。淡赤褐色。100~102は赤褐色。100は体部内面に広範囲に煤が付着する。101も丁寧にナデられているが、体部をヨコナデしたのち、逆方向へ戻してナデ上げる特異な手法がとられている。逆「く」字状のヴァリエーションではあるが、非常にめずらしい。102は逆「く」字状にナデ上げる一般的な手法である。103は二次的な火熱を受け、赤味がかった桃色を呈する。104は暗茶色。内面に煤が付着。口縁端部内面がわずかにくぼむ。これらは16世紀前半代のものである。

105~119は7-11トレンチからの出土。105・106は底径が大きく体部が短い扁平な皿。106は体部内面のたちあがり部分に不定方向のハケ目痕がのこる。107・108は暗茶色を呈する。ナデは不明瞭である。109~111・113は口径7.0~7.5cmの皿で、体部がつよく外反するタイプ。111は内面のヨコナデを斜めにナデ上げ、底部のみに煤が付着している。113は底部に外側から穿孔する。112は淡赤褐色を呈し、底部を小指の先で浅く押しくぼめる。114は口径9.0cm弱を測る。底径が大きく、体部は直線的にたちあがる。115はやや厚手の口径10.0cmクラスの皿。内面をヨコナデしたのち、垂直方向へナデ上げる。116もおなじく垂直方向へナデ上げる。口縁部1/6に煤が付着する。117は口径12.0cmを測る。淡褐色で、体部は比較的ゆるやかにたちあがる。ナデは弱く、ナデ上げは確認できない。118・119は口径16.0cmの大皿。逆台形の側面観をもつ器形だが、118には体部内面の随所にハケ目痕がのこる。ナデ調整の前の整形時のものであろう。119は口縁部が外反する。ナデは弱い、丁寧に施されている。以上の遺物は、おおむね15世紀後半~16世紀初頭ごろのものと考えられる。

120~123は7-12トレンチ出土。120はコースター状の皿で、12世紀後半ごろと思われる。121~123は器壁が5~6mmと厚手である。見込み端部に圏線を有する。121・123には煤が付着する。また121は体部外面に粘土の接合痕をのこす。いずれも16世紀末ごろのものであろう。

124~126は7-13トレンチ、127は7-15トレンチ出土。124・125は淡灰色。125はへそ皿である。126は口縁部1/2程度に煤が付着する。ナデは非常に弱い。126は赤褐色を呈する。平底で体部の外反がきつい器形。16世紀初頭前後であろう。

128は8-9トレンチ出土。109~111などとおなじ器形で、茶褐色を呈する。16世紀初頭ごろ。

129~134は9-3トレンチより出土。129~132は1段ナデ。131は底部に渦状の粘土接合痕がのこる。体部が丸みを帯びてたちあがる。133は口径15.3cmで、口縁は1段面取り。面取りは水平方向から施されている。淡灰色。これらは9-7トレンチの下層から出土したもので、13世紀代と推測される。134~137は上層からの出土。134は口径9.0cmの皿。ナデは丁寧である。口縁

端部は比較的強くナデられており、外面に凹凸がみられる。135はナデが非常に不明瞭なタイプ。底部を大きくくぼませる。口縁部に煤が付着。136は淡赤褐色の皿。体部はやや短く、若干内湾する。137は口縁部がつよく外反するタイプである。見込みの端にV字状の溝が入っている。近世の所産であろう。

138は器壁が6mm前後と厚い。淡赤褐色で、側面観は逆台形である。口縁部に煤が付着。9-1トレンチ出土。16世紀末ごろのもの。

139・141・142は土師質の羽釜である。139は大和型で、15世紀ごろ。6-8トレンチより出土。141は1-1トレンチから出土した大和型。17世紀か。142も羽釜であろう。口縁端部が直上するように尖り、口縁部は「く」字状につよく屈曲する。淡橙褐色を呈する。9-7トレンチ出土。140は鍋。淡赤褐色を呈する。内面をハケで調整する。口縁部外面の一部に煤状の物質が付着する。1-1トレンチ出土。

143は7-15トレンチ、144は7-13トレンチ出土。143は砂粒を多く含む胎土で、小壺形につくるもの。伏見人形の初期のもので「ツボツボ」と呼ばれるものでであろう。144は羽釜のミニチュア。口縁端部を直立させており、茶釜をかたどっている。

出土土師器の全般的な傾向についてさいごに贅言しておく、京都産土師器とほぼ同一の製作技術を基盤としながらも、器形まで同時期のものと似せるか否かで、おおきくふたつのグループに分けられる。前者の資料を年代のおよその手がかりとしてきたが、遺物の帰属年代は、12世紀後半から13世紀代と、15世紀末から16世紀代に集中する傾向がみとめられる。とくに後者は坊院跡が点在する地域の焼土層から出土しており、かかる地域がこの時期に火災にあったことを想定させる。

B. 瓦器・瓦質土器 (図版43・44-170、写真図版57・58)

145~149は皿。平底で、短い体部が外反気味にたちあがる形態である。全体的に歪みが大きい。145・147~149は底部内面に太さ約1mm程度のジグザグ状のヘラミガキを施す。145は1-1トレンチ、146~148は6-6トレンチ焼土層出土。149は6-3トレンチ出土。150~152は小椀。151は口径8.4cm、器高3.0cmを測る。底径が大きく、体部は張りをもちつつ端部を外反させる。六器を模倣した器形である。体部内外面を横方向に、見込みにはジグザグ状のヘラミガキを施す。

152は口径9.6cm、器高3.6cmを測る。体部内面と外面上半を緻密にヘラミガキし、見込みをジグザグ状にヘラミガキする。ともに12世紀後半ごろか。150は5-4トレンチ、151は6-6トレンチ、152は3-4トレンチ出土。153~160は椀。153は9-7トレンチ出土。断面三角形の高台がしっかりとはりつけられるものである。12世紀後半ごろ。154・155は口径14.1cmを測る大和型の瓦器椀。ともに6-6トレンチ焼土層出土。154は口縁部外面と体部内面にまばらにヘラミガキを施す。12世紀後半~13世紀前半ごろのもの。155は体部内面のヘラミガキが密に施され、見込みに連結輪状のヘラミガキが施される。154よりやや古く、12世紀後半ごろとみられる。156は口縁端部内面に沈線をもち、体部内面をヘラミガキする。13世紀前後の楠葉型。1-1トレンチ出土。157は大和型。見込み部分は炭素がとんでいるが、連結輪状のヘラミガキを施す。体部内外面をヘラミ

ガキする。12世紀後半。1-1トレンチで出土。158も大和型。体部内面のヘラミガキは間隔があいている。13世紀ごろか。7-7トレンチ出土。159は体部内面の上方に粘土の接合痕がのこる。粘土をつぎたして椀の口径をひろげるといふ、めずらしい事例である。体部内面にヘラミガキ。楠葉型か。13世紀代。6-8トレンチ S X 6801より出土。160は口径10.2cmを測る。口縁部はナデによってわずかに外反する。ヘラミガキは体部内面で数条観察できる程度である。13世紀末期の大和型。7-11トレンチ出土。本遺跡の瓦器椀は大和型が多いが、これは宇治市域の全般的な傾向と一致する。

161は瓦質高坏の脚部。平安京でよくみられる土師質の高坏とおなじ形態である。瓦質に焼成した例はきわめて少ない。7-15トレンチ出土。162・163は瓦質浅鉢。香炉形の器形である。162・163ともに、体部外面に八葉の菊花文をスタンプで陰刻する。163は2次的な火熱を受けたためか、炭素がとんでしまっている。162は9-7トレンチ、163は4-6トレンチ S D 4608より出土。15世紀ごろ。164~167は瓦質土器羽釜。165は内面にハケ目痕が密にのこる。164・165とも口縁端部内面に段差をもつ。いずれも14世紀であろう。164は1-1トレンチ S K 1103、165は9-7トレンチ、166は7-11トレンチ出土。167は鏝の上面の幅が長く、かつ内湾するタイプで、口径27.0cmの大型品である。炭素の吸着はじゅうぶんで、黒色を呈する。15世紀代。9-7トレンチ出土。168は鉄鉢状の器形か。口縁端部内面をとくにナデで縁をつくっている。外面には丁寧なミガキが施される。15世紀代か。7-15トレンチ出土。169は浅鉢。雲形の装飾をとめない、獣足が3本つく器形。外面は丁寧にミガキが施される。16世紀代か。7-11トレンチ出土。170は浅鉢。脚部を有するか否かは不明。7-15トレンチ出土。15世紀代であろう。

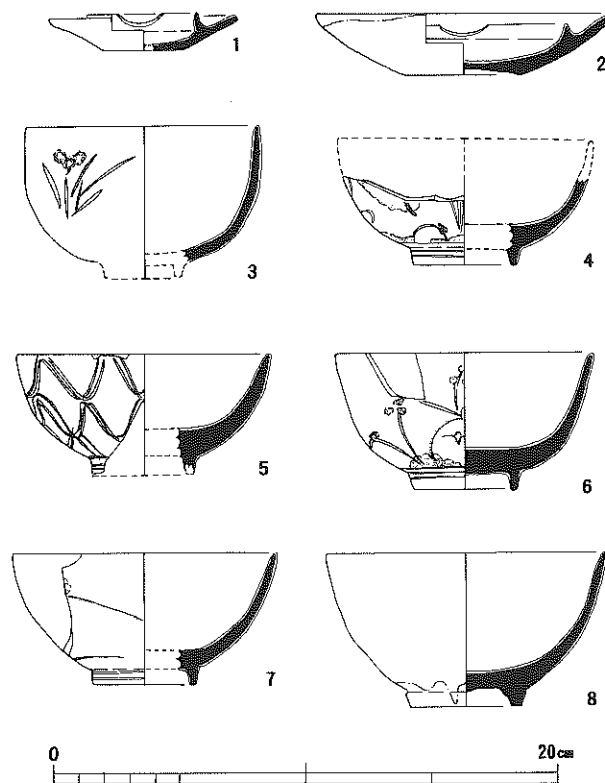
C. 須恵器・国産陶器 (図版44-171~187・図版45-188~192、写真図版59)

図版44-171~173は、口径24.0cm~34.2cmを測る東播系須恵器すり鉢。171は茶灰色を呈し、口縁端部が「く」字状に鋭く屈曲するタイプで、12世紀中ごろから後半のもの。7-12トレンチ出土。172・173は暗灰色を呈し、口縁端部が三角形を呈する。12世紀末から13世紀前半のものであろう。いずれも体部内面下部に擦痕がのこる。172は6-6トレンチ、173は8-5トレンチから出土した。174は須恵質の小皿。淡茶灰色の精良な胎土。口径7.8cm、器高2.1cmを測る。内外面をロクロナデするが、底部外面の中央はナデによってくぼんでおり、糸切り痕は観察できない。体部はロクロナデによって内面に段差をつけてたちあがる。須恵器とおなじく堅緻に焼きあげられているが、宇治周辺では例のない資料である。8-9トレンチ出土。175はいわゆる山皿(灰釉系陶器)。口径8.7cm、器高2.7cmをはかる。丸みをおびた高台が粗雑にはりつけられている。胎土はややざらつきがあり、白色粒が若干混じる。尾張産で12世紀後半。6-6トレンチ出土。176は山茶椀(灰釉系陶器)。口径14.7cm、器高5.4cmをはかる。淡灰色で、粗雑にはりつけられた輪高台をもつ。高台には糊殻痕がのこる。尾張産で13世紀中ごろであろう。9-11トレンチ出土。177は渥美産陶器の壺底部。しっかりした輪高台をはりつけている。内外面にはヨコナデが施されているが、内面はその後板状の工具で斜めに圧迫を加えている。外面には淡赤茶色の釉がかかる。6-3トレンチ出土。178は灰釉陶器の深椀か。口径20.7cmを測る。淡灰色で、胎土は砂粒

をわずかに含む。内面に斑状にわずかに黄緑色の釉がかかり、草花文を陰刻する。6-6トレンチ焼土層からの出土。179は須恵器の大平鉢。口縁端部は尖り、体部はわずかに内湾する。6-6トレンチ遺構面出土。180は古瀬戸の緑釉小皿。底部を回転糸切りし、口縁端部は内側に少し屈曲する。内面から体部外面中央付近まで淡緑色の釉がうすくかかる。成形時に体部中央に穴があいたらしく、釉の一部が漏れ出ている。9-7トレンチ出土。181は古瀬戸の緑釉折皿。淡緑色の釉葉がかかるが、見込み中央は化粧がけのみおこなって、釉葉をかきとっている。底部外面に輪トチンの破片が付着している。7-12トレンチSK7123出土。15世紀代であろう。182は瀬戸焼小皿。緑灰色の釉がかかる。高台は露胎で、輪状に削りだす。1-1トレンチ出土。183は古瀬戸椀。口径は16.2cmを測る。内面から体部外面中央まで淡黄色の釉がうすくかかっているが、2次的な火熱をうけて風化している。7-11トレンチで焼土とともに出土した。184は陶器椀。唐津か。暗灰色に焼きあがる。内面から体部外面中央にかけて緑灰色の釉がかかり、内面には鉄釉で模様が描かれる。見込み中央には胎土目がのこる。17世紀。185は陶器。台の脚部か。緑色の釉葉が厚くかけられ、貫入が著しい。近世のものか。186は陶器椀。志野か。高台を削り出す。内面から体部上半にかけて鼠色の釉をかける。見込み中央3カ所に胎土目の痕跡がみられる。17世紀以降であろう。7-15トレンチで出土。187は信楽焼すり鉢。胎土は長石を多く含む。内面は淡茶色だが、外面は灰白色を呈し、焼成は不十分である。また外面には粘土の接合痕がのこる。すり目は櫛状工具によって4条入れられている。口縁部内面に煤付着。15世紀代。184・185・187は9-7トレンチ出土。188は備前焼と思われるが、器種は不明。2-2トレンチ出土。189は信楽焼すり鉢。赤茶色で、硬質に焼きあがる。

すり目は5条で、櫛状工具によって入れられる。16世紀のものか。190~192は瀬戸美濃の天目茶椀。口径は12~13cm程度である。みな鉄錆で外面を化粧がけしたのち、濃黒茶色の鉄釉をかける。190・191は2次的な火熱をうけたらしく、変色や風化が著しい。いずれも15世紀後半から16世紀のもの。190は9-7トレンチ、191は9-3トレンチ、192は7-13トレンチ出土。

第44図は近世の遺物である。1・2は陶器製の灯明皿。1は口径7.5cmを測るが、2は口径12.0cmとやや大きい。いずれも内面にかかりを設け、施釉する。3~8はいわゆるくらわんか碗。口径10.0~11.0cm程度で、体部はまるく内湾する。



第44図 近世陶磁器実測図

外面に草花文(3・6)、二重網目文(5)などが描かれる。8は外面前面に鉄釉が施される。18世紀前半から中ごろのものであろう。1～6は2-1トレンチ、7は4-1トレンチ、8は7-15トレンチより出土。

D. 輸入陶磁器(図版45、写真図版60・61)

経塚関連遺構以外で出土した資料を報告する。青磁(193～206)・白磁(207～218)がある。

193は青磁輪花皿。口縁部外面に波状の文様が描かれる。見込み中央を釉はぎする。2-2トレンチ出土。194は同安窯系青磁皿。釉は灰色に発色し、見込みに文様が描かれる。7-8トレンチ出土。195は龍泉窯系青磁小碗。口縁端部がつよく外反し、内面には文様が描かれる。7-15トレンチ出土。196は龍泉窯系青磁の鉢か。口縁部がつよく内湾し、外面には蓮弁文が描かれる。8-5トレンチ出土。197は同安窯系劃花文青磁碗。二次的な火熱をうけており、表面は青白色に変色している。8-25トレンチ出土。198は青磁碗か。剣先蓮弁文が外面に施される。表面が荒れており、二次的な火熱を受けた可能性がある。9-2トレンチ出土。199は青磁碗か。口縁端部がつよく外反する。1-1トレンチSK1104出土。200は龍泉窯系青磁碗。口縁部がわずかに外反する器形である。1-1トレンチ出土。201は龍泉窯系青磁碗。淡緑色の釉葉が底部外面をのぞく範囲にかかる。9-7トレンチ出土。202は同安窯系青磁碗。見込み中央と体部内面に劃花文を描く。1-1トレンチ出土。203は龍泉窯系劃花蓮弁文青磁碗。内面に劃花文、外面に蓮弁文を施す。6-8トレンチ出土。204は龍泉窯系蓮弁文青磁碗。7-11トレンチ出土。205は青磁香炉の底部か。底部のみ露胎で、外面に淡緑色の釉が厚くかかる。2-2トレンチ出土。206は龍泉窯系青磁碗。底部のみの破片で、高台接地面のみ露胎。8-25トレンチ出土。

207～209は白磁皿。208は体部中央でつよく屈曲する。209は二次的な火熱を受けている。210は削りだしの輪高台をもつ白磁皿。見込み部分をドーナツ状に釉はぎする。以上は6-6トレンチからの出土である。211は口禿の白磁。器種は判別しがたいが、かなり深身の器形である。1-1トレンチSK1110出土。212～214は玉縁口縁の白磁碗。212は4-1トレンチSX4104より出土。二次的な火熱をうけている。213・214は6-6トレンチ焼土層から出土した。215～218は白磁碗の底部片。215は見込み中央に劃花文を施す。高台を削り出す。1-1トレンチ出土。216は見込み端部を釉はぎし、重ね焼きの痕跡がのこる。6-3トレンチ出土。217は比較的薄手の碗。9-7トレンチ出土。218は大型の碗か。器壁は1cmとかなり厚く、高台は露胎である。2-1トレンチ出土。

3. 石製品(図版46・47-18～23、写真図版58・62)

A. 石鍋・石鍋再加工品(図版46、写真図版62)

完形品はなく、ほとんどの遺物は二次的な加工をうけていた。1・2は滑石製の石鍋。1は口径25.8cm。鏝の部分に煤が付着。破面の1つはヤスリ状の工具で削られており、平らにならして整えられている。2は口径27.0cm。口縁端部がかなり肥厚しており、鏝の削りだしが不十分な作例である。鏝の上下には幅1～2mm程度の溝がある。また、内面も凹凸がノミではつった時の凹

凸が著しく、石鍋製作時の加工は粗雑である。3は石鍋の再加工品。幅4mmの断面V字状の溝を彫り入れて割っている。また一部を円弧状に研磨し、穿孔(径5mm)を試みている。外面には煤が全面に付着する。以上は1-1トレンチより出土。4~13は滑石製石鍋の再加工品。4は口縁部直下から縦長の取っ手がつくタイプ。灰色。内外面は平滑である。口縁端部をヤスリ状工具で削る。また取っ手の外側から穿孔が試みられているが、U字状の溝になって失敗している。5は部位不明。3.0cm大、高さ1.5cmのボタン状に加工されている。全体的に丁寧に研磨され、光沢を有する。ボタン状部分中央下に穿孔。径5mmで貫通する。特筆すべきは鉄製の錐状工具がのこっている点である。途中で曲がり、抜けなくなったものであろう。工具は長さ2.5cm程度で、太さ2mm程度を測る。両端のうち、一方が鋭く尖る。本例はいかなる工具で穿孔したかを探るうえで好適な資料である。6は底部に近い体部片を加工したものか。外面を幅1.0cm、長さ2.0cmのノミ状工具ではつる。煤付着。下部の半分ほどを、内側からすり切ってから折り割る。また破面の1つをヤスリ状工具で水平方向に平たくならしている。7は胴部破片。外面はノミ状工具で密に削られる。内面を1.0cmぐらい削り、不定形の島状突起をつくりだす。島状部分で1カ所穿孔。幅5mm、長さ2.0cm。両端から工具を用いて穿孔する。半分ほど穿孔し終えたところで、反対側から穿孔して開通させているが、1回目は失敗したようで、穴の開通部からはずれている。8は胴部破片。幅5mm前後の削り跡が外面にのこる。ノミ状工具によるはつりであろう。平滑に仕上がっている。内面は研磨。1カ所穿孔されている。9は口縁端部の破片。鏝以下を欠損する。口縁端部上面・内面は平滑に研磨され、外面は小さいノミ状工具(幅3mmくらい)で斜めにはつる。下側の破面が研磨されている。研磨面から穿孔を試みるも、途中で折れてしまったようである。10は口縁端部の破片。9と同一個体とみられる。口縁端部上面・内面は平滑に研磨されている。外面は小さいノミ状工具(幅3mmくらい)で斜めに密にはつる。こちらも平滑である。9と同様、下側の破面は研磨されている。口縁部の破面のうち1面を丁寧に研磨したのち、そこから穿孔を試みている。口縁部に沿った方向だけに、開通を目的としたものではない。径6mm、深さ1.3cm。先端部の径も4mm程度はあり、かなり太めの工具を用いたようだ。口縁部外面から1カ所穿孔。径6mm、深さ1.0cm程度。同様の工具を用いる。11は部位不明。下面の一部に幅7mm、長さ1.5cmのノミ状工具痕がのこるが、全体的にきわめて丁寧に研磨されている。上面に六角形のくぼみをつくりだす。幅1.5cmの彫刻刀のような工具を何回かあてながら、円形をつくりだそうとした結果であろう。圏部を深さ3mmほど削りこんでから内部を削ったため、くぼみの底面は水平ではない。12は胴部破片。外面は幅1.0cmほどのノミ状工具で縦方向にはつる。内面は研磨。上下両面のうち、1面の大半をすり切ったのち、折り割っている。破面1面をヤスリ状工具で研磨する。13は胴部破片か。全面研磨されており、工具不明。煤が内面全体に付着。外面はかなり削られていて現状をとどめていない。二次加工として、6.5cm×7.0cmの楕円形をつくりだしている。表面はヤスリ状工具をあてて削っている。側面には少なくとも5カ所、穿孔を試みた跡がのこる。穿孔位置や角度からみて、何かを通すための穴をあけたとは考えにくい。14は滑石製石鍋。口径18.6cmを測る。鏝は断面台形で、基底部両端に成型時の溝がかすかにのこる。胴部は幅5mm大の

ノミ状工具で縦方向に密に削って整形する。内面も同様に削ったのち、研磨する。口縁部の破面にはV字状の挟りが横に入っている。口縁端部から斜めに工具を入れて削り、その後折り割ったようだ。15は滑石製石鍋底部。底径18.0cm。底部外面は幅1.2cm、長さ2.6cm大のノミ状工具で横一方向に小判型にはつってゆく。体部外面は幅1.0cm、長さ2.0cmのノミ状工具で削る。どちらも痕跡が明瞭にのこっており、力強いタッチという印象を受ける。外面に煤が付着している。本例は意図的に半分に割られている。あらかじめ割るラインを決め、2.0~3.0cm間隔で釘を打ち込んだのち、穴に沿ってすり切るという方法である。ラインは大きく曲がっている。内面からもすり切っているが、こちらは釘穴の痕跡はない。幅2mmの溝がはしるが、こちらも大きく曲がっている。破面はおおよそ2.0cmごとに波うっているため、その長さの工具を何回も当てるようにして切断していったと思われる。内面側は4mm程度の深さまで達したときに、手で折り割る。16は口縁部破片。口径14.8cm。断面台形の鏝。鏝の中央から割れている。内面も研磨される。口縁部の2カ所に斜めの傷が確認される。最大幅1.0cm、長さ2.5cm。断面V字状。この大きさの工具を用いて、ここから割ろうとしたようだ。鏝部1カ所に上から穿孔するが、鏝の先端が破損したため失敗している。17は、縦長の取っ手が口縁部直下からつくタイプ。外面に煤が付着する。長さ2.0~2.5cmの工具で丁寧に外面を削る。口縁端部上面・内面は平滑に研磨される。二次加工の痕跡はない。4~17は6-6トレンチ遺構面から出土した。

以上のように、白川金色院跡から出土した滑石製石鍋は、ほぼすべての資料に二次的な加工が施されている。滑石製石鍋の破片を再加工する例は寺院遺跡などでみられ、寺院という性格と関連づけられて温石と想定されることが多い。しかしながら、本例をみるかぎり、大きさや形状にはかなりのヴァリエーションがあり、これらを一様に温石とするのはためらわれる。再加工品(しかも未成品)がきわめて多い点も含め、今後再検討する余地があるだろう。

B. 砥石・その他 (図版47-18~23、写真図版58・62)

図版47-18・19は砥石。1-1トレンチ出土。18は摩滅が少ないが、19は著しく、片面に凹凸が顕著にのこる。金属製品を研ぐためのものであろう。20は砥石。乳白色で、18・19と比べると石のきめは細かい。仕上げ用の砥石か。7-11トレンチ出土。21は石英製品。片面は玉石状に整形されているが、用途はわからない。4-1トレンチ出土。おなじような石英の破片は5-1トレンチなどでも出土した。仏具にかかわる製品と考えられる。22(写真図版58)は凝灰岩製の石塔。推定27.5cm四方の屋根部分の破片である。2-1トレンチ遺構面上の出土。全体的に風化が著しいが、隅木、降棟が表現される。宝塔の一部である。鎌倉時代ごろか。23は7-13トレンチより出土した凝灰岩製の石臼である。下臼の部分で、台部と受け皿部が残存する。底部径28.0cmを測る。表面には漆が塗布され、塗りなおした跡もみられる。江戸時代の茶臼であろう。

4. 金属製品・漆器他 (図版47-1~12、写真図版62)

図版47-1は漆椀。黒漆の上に朱漆で秋草(ススキか)を描く。塗椀として塗られた漆のうえにさらに漆が付着しており、漆容器などに転用されたようだ(付載2参照)。1-1トレンチ出土。

2は土鈴。淡黄褐色の精良な胎土で、手づくね。宝珠形につくり、突起部分に穴をあける。2-1トレンチ出土。3は伏見人形の鶏。外型で鶏のかたちをふたつつくってはりあわせる。風化が著しいが、鶏冠および羽、台座の部分にはかすかに彩色の跡がのこる。2-1トレンチから出土。2・3いずれも江戸時代のものである。4は鞆の羽口。外形7.5cm、内径3.0cmを測る。一部にスラグが付着する。3-1トレンチの鍛冶関係遺構SK3105から出土した。5は青銅製品。全長7.5cmで、先端部7mm程度は針状に尖る。工具か。1-1トレンチ出土。6は鋸。断面は0.5cm四方の正方形で、あまり大きな建築部材に用いるものとは考えにくい。7は板状の不明鉄製品。全形はとどめていない。厚さが2~3mm前後と薄いため、刃物ではないと思われる。金具のたぐいか。いずれも4-3トレンチ出土。8~12は鉄釘。11は全長5.7cm、12で約9.3cmを測る。10・11は端部をたたきつぶして頭部をつくるが、8・9は平たくたたきつぶした端部を直角に折り曲げて頭部をつくりだす。8~11は4-1トレンチ、12は4-6トレンチSD4608より出土。これらも堂宇に伴うものではなく、内装にかかわる小規模の木造構築物に使われたものであろうか。

5. 経塚関連遺物 (図版48~50、写真図版63~71)

A. SX5501出土遺物 (図版48・49、写真図版63~68)

SX5501からは和鏡をはじめ、青白磁、漆製品、数珠玉、毛抜き、鉄釘、銭貨といった多彩な遺物が出土した。図版48-1・2は和鏡。なお鏡の成分分析については付載1を参照されたい。1は青銅製山吹双鳥鏡。口径10.8cm、重量114.9gをはかる。鈕は円錐台形で、振菊をかたどった鈕座をもつ。山吹の花を3つ配し、その間を2羽の鳥と1匹の蝶が舞う構図が篋押しによって陽刻される。山吹など描かれた風物は、花の数や形状といった細かいモチーフが一致しており、定型化されたデザインにもとづいていることがわかる。全体的に鑄あがりは良く、錆の発生も少なかった。2は白銅製秋草蝶鳥鏡。口径11.7cm、重量244.8gをはかる。鏡背全体をひとつのカンヴァスとして、風にそよぐススキなど秋の草花のなかでとびかう2羽の鳥と4匹の蝶を篋押しで陽刻する。草花の描写が動的であるのに対し、鳥や蝶の表現には躍動感が感じられず、定型化されたデザインという印象が強い。花蕊座のうえに、まるみのある円錐形の鈕がとりつけられる。遺存状態はきわめて良好で、鏡背は光沢を有し、鏡面もぼんやりながら顔が映せるほどであった。きわめて丁寧に鑄造された製品である。図版49-3は、青白磁刻花牡丹文子持合子。蓋は口径10.8cm、器高2.1cm、身は口径9.1cm、器高2.9cmを測る。蓋にはくずれた牡丹文を刻む。身は削りだした浅い輪高台を有し、なかに直径2.7cm、高さ1.5cmの小碗を3つはりつける。釉は蓋の内面、身の口縁部・高台をのぞく範囲に施されている。身の中央部には蓮華をかたどった飾りがあり、そこから茎・葉のかたちをした装飾をはりつけて3つの小碗を区画する。蓮の装飾と小碗を内部にもつ例としては、倉狭間遺跡(兵庫県加西市)の出土例があるが、大きさや色調、蓋表面の文様は異なる。いずれにしても国内ではきわめて類例が少ないタイプである。蓋・身ともに口縁部に幅0.3cm、長さ1.0cmほどの浅い溝状の傷がある。この位置であわせるともっともきれいにはまることから、使用の際に目印としてつけられたようだ。4は青白磁印花蓮華文小壺。蓋は口径は

3.6cm、器高は1.1cm、身は口径4.7cm、胴部最大径6.1cm、器高3.6cmを測る。蓋にはつまみがなく、身は胴部上半がはりだす。胴部のもっともふくらんだ箇所の内面に粘土の接合痕がのこる。蓋には単弁八弁の蓮華、身には蓮の葉の印花文を施す。蓋は歪みが大きく、やや粗雑な印象をうける。5・6は漆製品。現状では層状に折り重なった漆塗膜片のみのこっており、もとの形状はわからない。出土した時点では数珠玉(23・24)をはさみこんでいた。塗膜構造の分析は付載2に譲るが、木胎の痕跡はなく、紙の繊維が検出されたことや、数珠玉をはさみこんだ出土状況から考えて、紙胎の念珠箱であった可能性が高い。類例として、金剛峯寺(和歌山県)に現存する紙胎花蝶蒔絵念珠箱があげられるが、本例には蒔絵を施された形跡はない。7は全長7.5cmの鍛鉄製の毛抜き。両側の先端部を折り曲げる。8～24は木製の数珠玉。計31顆出土し、うち2顆は漆製品にはさみこまれていた。いずれも径0.5～0.6cmを測る。まるみのあるそろばん玉状で、穿孔箇所はわずかに平たい。斜めに曲がって穿孔されたものや、孔が方形をなすものもある。樹種は不明であるが、表面に漆が塗布された形跡はなく、白木であったようだ。25は約1.0cm大の鉛ガラス製小玉。半球形で、うすいコバルト・ブルーを呈する。26・27は青銅製品。円錐形で全長1.4cm。厚さ0.2mmの青銅板を曲げて成形する。数量や出土位置からみると念珠の金具(記子留)である可能性が考えられるが、伝世品にみえる一般的な形状とは異なる。瓔珞である可能性も考えられ(実際、瓔珞の出土例は弁天島経塚群[京都市右京区]などでいくつか知られている)、どちらとも断定しがたい。28は皇宋通寶(初鑄1038年)。S K 5501で唯一出土した銭貨である。29～47は鉄釘。陶磁器より下層で計19本出土した。うち5本は完形で、平均長は7.4cmを測る。すべてに木質(針葉樹)が付着していたことから、木箱に使われていたと思われる。ただし、釘の出土位置とほかの遺物の出土位置とはずれがあることから、木箱には腐朽しやすい別のものがおさめられていたと推測される。以上、類例の少ない遺物が多いために厳密な年代の比定がむずかしいが、和鏡の年代を積極的に評価するならば、おおむね12世紀後半ごろに位置づけられる。

B. S X 5502出土遺物(図版50-48~51・69、写真図版68)

図版50-48~51は鉛ガラス製の小玉。細片も含め、計9点出土した。口径は0.5cm前後。風化が著しく、白濁していた。69は青白磁印花文合子。蓋は口径6.4cm、器高1.7cmを、身は口径4.4cm、器高1.9cmを測る。淡青白色のガラス質の釉薬がいずれも外面にかかる。蓋の表には七曜文と牡丹の印花文が施される。身の体部内面には粘土の接合痕があり、外面の装飾も型押しによって施されたことがわかる。かかりははりつけられている。

C. S K 5503・S K 5504・S X 5505出土遺物(図版50-70~74、写真図版70)

図版50-70は瓦器皿。口径8.4cm、器高1.7cm。暗灰色で、炭素の吸着は不十分である。見込み部分にジグザグ状のヘラミガキを施す。S K 5503上面出土。12世紀後半ごろか。71~73は不明土製品。いずれも10.0cm弱の大きさである。胎土は2~3mm大の白色砂粒を多量に含む。73はL字状の形態をなすが、全形は想定しがたい。S K 5504出土。74は、S K 5505から出土した瓦質経筒外容器である。円筒部の1/4程度が残存し、底径30.0cm、残存高15.0cmを測る。精良な胎土で、外面のみ炭素を吸着させる。基底部に2条、また胴部に少なくとも1条、断面三角形の凸帯をめぐ

らせる。内面にはハケ目痕が観察される一方、底部外面には離れ砂の痕跡があるなど、瓦の技法が一部で採用されている。外面には「□ □ 蓮華経」の文字と蓮華座が刻印される。おそらく4カ所に刻印されたものであろう。蓮華座の上に題目を記すというモチーフは、線刻の例として鞍馬寺経塚(京都市左京区)出土の銅製経筒(鞍馬寺所蔵)にみえ、平安後期から存在するが、本例はそこまで年代をひきあげることはむずかしい。瓦質土器という点から14世紀以降と考えておきたい。

D. S K 5506・S K 5507出土遺物 (図版50-52~68、写真図版69)

銭貨が総計17枚出土した。52~61はS K 5506、62~68はS K 5507出土である。内訳は咸平元寶(初鑄998年)1枚、皇宋通寶2枚、嘉祐通寶(初鑄1056年)1枚、熙寧元寶(初鑄1068年)1枚、紹聖元寶(初鑄1094年)2枚、元祐通寶(初鑄1086年)1枚、政和通寶(初鑄1111年)2枚、天禧通寶(初鑄1017年)1枚、至和元寶(初鑄1054年)1枚、元豐通寶(初鑄1078年)2枚、聖宋元寶(初鑄1101年)1枚、大觀通寶(初鑄1107年)1枚、不明1枚である。最新の初鑄年からみても、埋納が康和4(1102)年の創建時ではなく、それ以降であることは確実である。

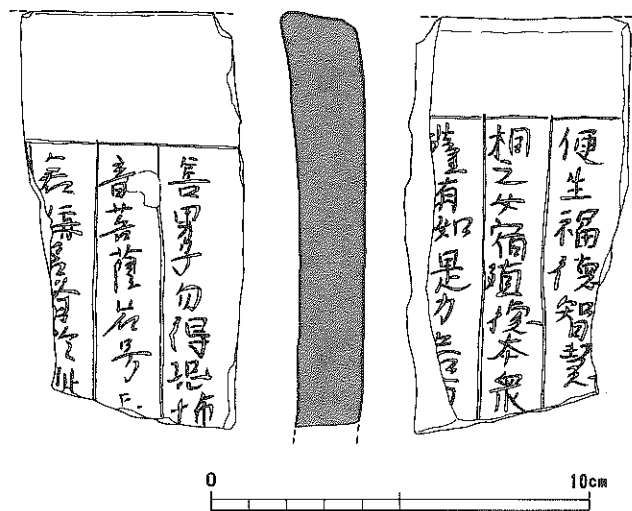
以上、S X 5505が14世紀以降と想定されるほかは、おおむね12世紀後半ごろの年代が考えられる。経塚群の造営は12世紀後半ごろと14世紀以降の2度あったものと考えられる。

E. 遺構外出土遺物 (図版50-75~78、写真図版69~71)

これらは表土掘削中に出土したもので、どの遺構に帰属するかはわからない。75・76は青白磁刻花文小壺の蓋。75は口径4.4cm、76は口径5.2cmを測る。いずれも淡青白色の釉薬がかかるが、75は発色が悪い。75のつまみは円筒形である。77は渥美産陶器の経筒外容器。受け口を含む体部がのこる。外面に二筋文が施される。口径19.2cmを測る。78は平瓦片。黒灰色の色調で、凸面に縄タタキの痕跡をのこす。河内向山瓦窯の製品で、12世紀代。

このほか特筆すべき遺物として瓦経がある(第45図、写真図版71)。これは福泉坊跡と想定されている5-1トレンチS X 5101から出土した。残存するのは瓦経の上端の一部分で、横5.5cm、縦11.0cm、厚さ1.7cmを測る。文字の大きさと1行あたりの文字数を勘案すれば、おそらく全長(縦方向)は23.0cm程度になろう。明灰色の非常に精良な胎土で、硬質に焼きあげる。両面2mm前後

はとくにしまった焼きあがりになっており、おそらく文字を陰刻しやすくするために、平瓦状に成形後、両面にさらにきめの細かい粘土を塗りつけたようだ。瓦経片は縦方向にわずかに反っているが、両面に陰刻された経文の順序から判断するに、凹面側が表となる。罫線は枠と縦線がそれぞれ約0.1cmの太さでひかれている。文字の大きさは約1.0cm角であるが、間隔は整っておらず、1行の文字数は統一されていない



第45図 瓦経実測図

い。線の太さは約0.1cmで、罫線とほぼおなじ道具を用いて陰刻されたものと思われる。経文は『妙法蓮華経』巻第七観世音菩薩普門品第二十五の一節である。釈文を下に掲げる。

【表面】

「善男子勿得恐怖

音菩薩名号□^(是)

若□□□□□^(稱名普於此)」

【裏面】

「便生福德智慧

相之女宿殖徳本衆

薩有如是力若□^(等)」

本遺物の年代は不明であるが、遺物や遺構の性格からみて、どこからか持ち込まれたものであることはまちがいない。ただし、この瓦経片が本山山頂の経塚群に帰属するか否かは、現状では判断する材料を持ちあわせていない。

6. 地鎮関連遺物 (図版51、写真図版71~73)

A. S X 4101出土遺物 (図版51-1~21、写真図版71)

土師器(1~19)、瓦器皿(20)、鉄製品(21)が炭と混じった状態で出土した。1~10は土師器皿。口径は10.0cm前後のものが大多数であるが、14.0~15.0cmのもの(9・10)もある。いずれも成形後、底部内面を一方にナデたのち、口縁部の内外面を時計回りにヨコナデを施す京都産土師器とおなじ整形技法が用いられる。胎土はいずれも良質であるが、赤色の微砂粒をわずかに含む個体もある。色調は全体的に淡橙褐色~黄褐色だが、一部は赤褐色を呈する(4・6)。ナデの微細な形状や器壁の厚さなどの点で京都産土師器とは異なっており、京都からの搬入とは考えがたい。1・2は口径9.0cm台の皿。1は内湾する口縁部に弱めの2段ナデが施される。2は1段ナデ。底部外面には渦状に粘土の接合痕がのこる。3~8は口径10.0cm前後の皿。7以外は2段ナデ。4は口縁部に粘土の接合痕がのこる。器壁は0.5~0.6cm前後とわりあい厚い。5は2とおなじく、底部外面に粘土の接合痕がのこるが、それとともに長さ1.0cm程度の小さい凹線が放射状にのこっている。底部の整形時についた工具痕か。口縁部はやや外反する。6は口縁部内面のヨコナデがつよく施されており、その境界に凹凸が明瞭にのこる。7のみ口縁部に1段ナデ。体部中央付近の内外面に凹線がのこり、ほかの資料とは異なるナデ手法を採用している。見込み中央に渦状の粘土の接合痕が確認できる。8は内面のナデを斜めにナデ上げる。9は口径14.1cm。口縁部はかなり凹凸を強調した2段ナデ。10は口径15.3cm、器高2.7cm。口縁部は弱めの2段ナデが施される。口縁部に煤状の有機物が付着し、灯明皿と思われる資料は2・7・8であった。

以上は京都産土師器に技法・器形ともに近い資料であるが、11~19は手づくねやナデの順序において京都産土師器と同一であるが、器形が大きく異なる。口径も1~10とは異なり、8.0~17.0cmの間で複数の法量が確認できる。胎土は全体的に微小な砂粒を含むものが多く、こちらもきわだった対比をみせる。色調は淡橙褐色~黄褐色のものが主流だが、赤褐色(14・16)や茶褐色(15)のものもある。内面全体に不定方向ナデを施し、口縁部外面の比較的狭い範囲をヨコナデするものが多い。いずれもナデが弱く、明瞭に確認できない個体が多いのが特色である。11・12は口径8.0cm前後の皿。13は口径9.2cm、器高1.7cm。明橙色を呈する。14・15は口径10.0cm前

後の皿。15には口縁部にタール状の有機物が付着する。16は口径13.0cm、器高2.8cm。かなり深みのある器形で、口縁部の内湾の度合いも大きい。粘土の接合痕が外面に確認でき、成形技法は京都産土師器と共通することがわかる。17は口径15.0cm、器高2.3cm。18は口径17.0cm、器高2.7cm。粘土を渦状に巻きあげて成形し、内面を同心円状にナデる。底部には糸切り痕は確認できないが、回転台（ロクロ）成形である可能性が高い。19は口径24.6cmを測る大皿。18・19のようにきわめて大きい皿は、同時代の平安京でも少量ながら出土している。口縁部は外反し、端部は四角形に近い。20は瓦器。口径9.8cm、器高2.4cm。一般的な瓦器皿と比べるとかなり身が深く、めずらしい器形である。暗黄色を呈し、炭素の吸着は不十分である。21は短刀。刃渡16.6cm（ほぼ5寸）、刃幅は最長部で2.6cm、茎は長さ8.8cm、幅1.6cmを測る。重量は約106.0g。鞘は残存していなかったが、柄と思われる木質が茎部にわずかに残存する。全体的に錆化が激しい。径0.5～0.6cmの目釘穴が1カ所観察できる。

土師器については、2段ナデのものが主流で、「て」字状口縁の資料が存在しないこと、1段ナデ面取りなど、2段ナデのあとに出現するものがないことからみれば、12世紀初頭～前半ごろのものと考えられる。これは、四条宮寛子によって康和4年（1102）に創建されたとする記事（『白川別所金色院勸進状』）と矛盾しない。

B. S X 4302出土遺物（図版51-22～32、写真図版72）

22～31は土師器皿。うち、22～24は器形・技法ともに京都産土師器に近い資料である。22は口径9.4cm、器高1.9cm。口縁部は比較的強く外反し、体部内面が途中で屈曲する。粘土の接合痕がのこる。黄褐色。23・24は口径10.0cm前後の皿。いずれも赤褐色で、口縁部に煤が付着する。器壁は0.5cm前後とやや厚い。一方、25～31は京都産土師器とは器形が大きく異なる一群である。25～30はいずれも口径10.0cm前後の皿であり、このサイズが大半をしめる。微小な砂粒を含み、赤褐色を呈するものが多い。26～29は煤が付着する。とくに27は内外面に斑状に付着する。いずれも体部は内湾する。30は底径の大きい平たい底部から短く直線的に口縁部がたちあがる。31は口径11.6cm、器高1.5cm。砂粒を含む胎土で、比較的硬質に焼成されている。橙褐色。32は瓦器。ミニチュアの椀であろう。底径は4.2cmを測る。見込み部分にはかなり密に平行線状のヘラミガキが施される。高台は断面逆三角形で、丁寧にはりつけられている。

瓦器に注目すれば、12世紀初頭～前半頃の年代に位置づけられる。土師器は、2段ナデでない皿がS X 4101出土の資料群よりめだつ点など後出的な要素がみとめられるものの、瓦器の年代と齟齬をきたすものではない。

C. S X 4303出土遺物（図版51-33～47、写真図版72）

33～46は土師器皿。うち、33～41は京都産土師器を模したものである。赤褐色系が主体をなす。33・34は口径9.0cm前後の皿。34はかなりデフォルメされた2段ナデ。35～39は口径10.0cm前後の皿。全体的に弱めの2段ナデが施される。35は1段ナデ。体部外面のほぼ全面に煤が付着する。40は口径11.0cm、器高1.9cm。焼成後に内側から1カ所穿孔が施される。暗茶褐色。41は口径11.7cm、器高2.2cm。2段ナデの上段をつまむようにしてナデており、口縁端部が真上へた

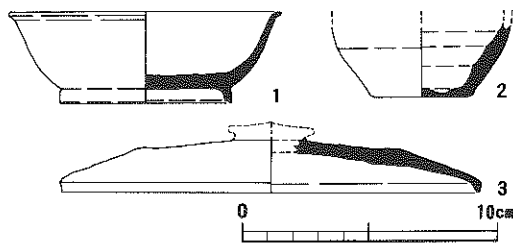
ちあがっている。42～46は京都産土師器の器形を模していない資料である。黄褐色（42・43）のものと赤褐色（44～46）の2種類がある。42・43は口径10.0cm前後の皿。43は灯明皿。粘土の接合痕が渦状にのこる。ナデは全体的に不明瞭である。44・45は口径11.0cm前後の皿。44には粘土の接合痕がのこる。いずれも口縁部は2段ナデだが、たいへん不明瞭である。46は口径13.0cm、器高2.4cm。口縁部は1段ナデ。外面のナデの境界部分に1条の沈線がのこる。47は鉄釘。端部を平たく叩きつぶし、直角に折り曲げて頭部をつくる。残存長で5.4cmを測る。土師器の様相はS X 4302と変わるものではなく、ほぼおなじ12世紀初頭～前半と考えられる。

D. S X 3403出土遺物（図版40-36・38・39、写真図版73）

3・4次調査で検出された一間四面堂跡の中央部で検出された遺構である。堂の内陣にあたる位置で、鉛ガラス製小玉、金箔の付着した漆塗膜片・炭・雲母片・土師器などがまとまって出土した。鉛ガラス製小玉は破片も含め17点出土した。いずれも径7～8mm前後、厚さ3mm前後で、径3～4mmの穴があく。透きとおった緑色を呈する。金箔の付着した漆塗膜片はおそらく仏像の光背の破片であろう（付載2参照）。土師器は図版40-36・38・39が該当する。いずれも淡赤褐色の精良な胎土であるが、焼成はやや軟質である。底部内面を一方向にナデ、体部内外面を時計回りにヨコナデするが、ナデは非常に弱い。39は2段ナデか。36・39の口縁部には数カ所に煤が付着。ほかの地鎮関連遺構の遺物とほぼおなじ年代であろうが、遺構の性格については地鎮とはただちに断定しがたい。

7. 創建前遺物（第46・47図、写真図版73）

第46図1は、口縁端部が平らに屈曲する緑釉陶器小椀。素地は灰色を呈し、堅緻に焼きあがる。濃緑色の釉が底部外面をのぞく全面にかけられている。高台ははりつけの輪高台で、接地面に段差をもつ。底部外面には回転糸切りの痕跡が、見込み部分にはトチンの痕跡がのこる。近江産で、10世紀後半ごろのもの。6-6トレンチ南東拡張部からの出土。2は須恵器瓶子。淡青灰色で、底部には回転糸切り痕をのこす。内面は凹凸が著しい。平安時代か。上明地区の7-9トレンチで出土。3は須恵器坏蓋。暗灰色で、径16.5cmを測る。奈良時代後期か。8-9トレンチから出



第46図 創建前遺物実測図1



第47図 創建前遺物実測図2

土。第47図は土師器皿。口径12.4cm、器高1.5cmを測る。石英粒をごく少量含み、淡橙色を呈する。「て」字状口縁で、器壁も0.2cm前後と非常に薄い。11世紀後半で、京都からの搬入品とみて大過あるまい。4-1トレンチS X 4104から出土。文殊堂が建立された地点が11世紀代にすでに造成されていた可能性を示唆する。これらはいずれも、断片的ではあるが白川金色院創建以前の土地利用の一端を推測させる材料である。

VI 総括

以上、平成5年度から平成14年度までの計10カ年にわたる発掘調査成果の概要を述べてきた。個別の問題については概報で触れてきたので、最後に白川金色院全体の概要をまとめて総括とする。

1. 遺構・遺物からみた遺跡の歴史の変遷

平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の順に従って、明らかになった各時代の主な成果内容と寺域の変遷を文献資料・現存建物などをあわせて述べていく。寺域の変遷については、小規模トレンチが多く、遺構把握の不十分さは否めないため、検出遺構と出土遺物とにそれぞれ分けて整理した。各検出・出土地点を落し分布図に作成したのが第48・49図である。また出土した軒瓦の編年試案を作成した。第50図がそれである。堂宇の屋根に葺かれた瓦に時代間の寺の様相が色濃く反映しているものと思われる。随時触れていくこととする。

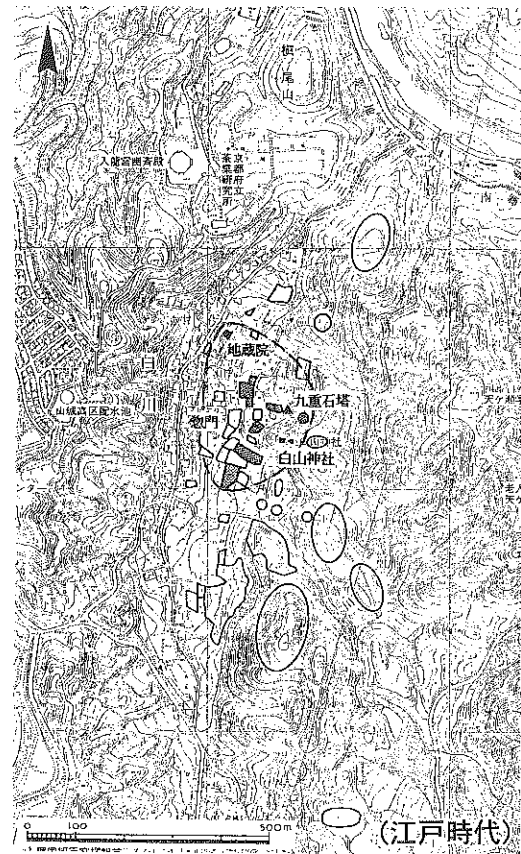
平安時代 同時代の文献では、別所としての性格をもつ以外には寺の実態をうかがい知ることができない。

第3次調査で、後世の『勸進状』が示す中心堂宇文殊堂の推定地点から12世紀前半創建の仏堂跡S B 3401が検出された。『勸進状』にいう藤原寛子創建期にこの寺が存在していたことが明らかとなった。しかしながらその規模は一間四面の南孫庇付であり、「勸進状」の記載とは異なる内容であった。文殊堂であるか否かは検討の余地を残すが、文殊堂であっても矛盾しない建物形式である。さらにこの仏堂西隣にも他の堂塔の存在が想定された。昭和55年度の調査から、仏堂の南には園池が広がっており、いわゆる浄土式庭園とも呼べる空間構成となっていたことがわかった。この園池跡南の棚田上の一角でも、第6次調査で平安後期の礎石建物が1棟確認された。仏堂か僧房かその性格は不明だが、北方向に張り出す小丘陵上で、その造成面は園池方向に向かって開放する。第5次調査では白山神社背後の山頂部で、12世紀後半の経塚関連遺構が検出された。この埋納は白川金色院創立から半世紀程後のことであり、白山神社同様に西の園池側を意識する。

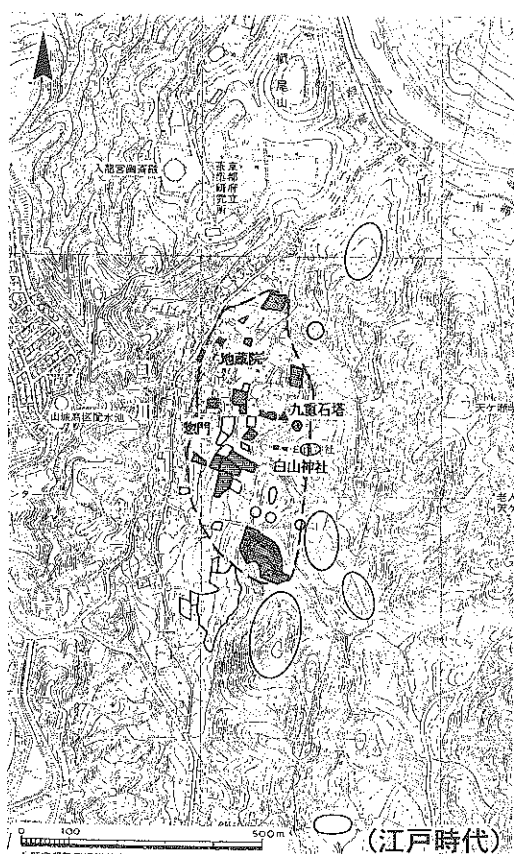
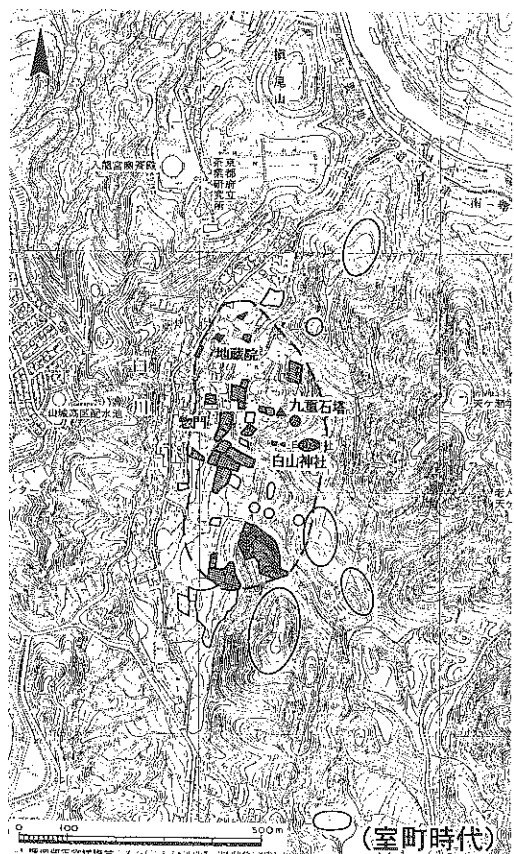
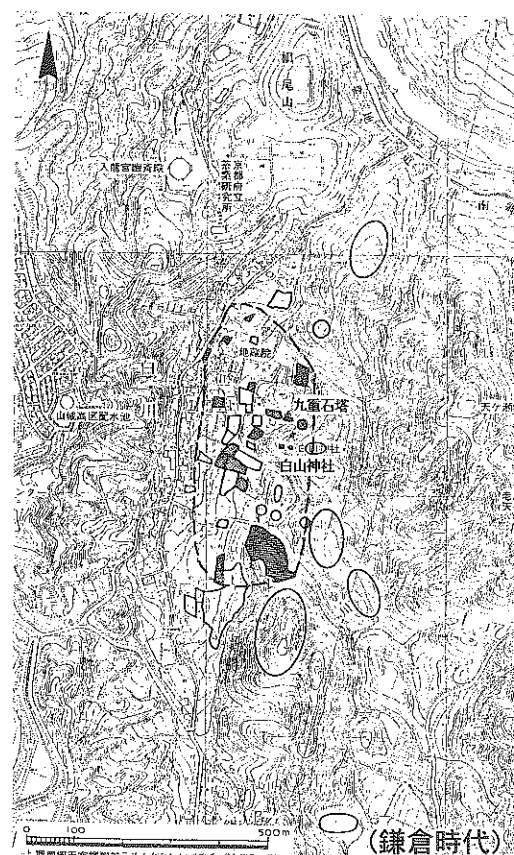
平安時代の白川金色院は園池を中心として、半ば求心的に建物配置がなされているようである。その範囲は比較的狭く、こぢんまりとした印象をもつ。

なお第6次調査で、創建時の作業場と想定される掘立柱建物が検出されたのは興味深い。

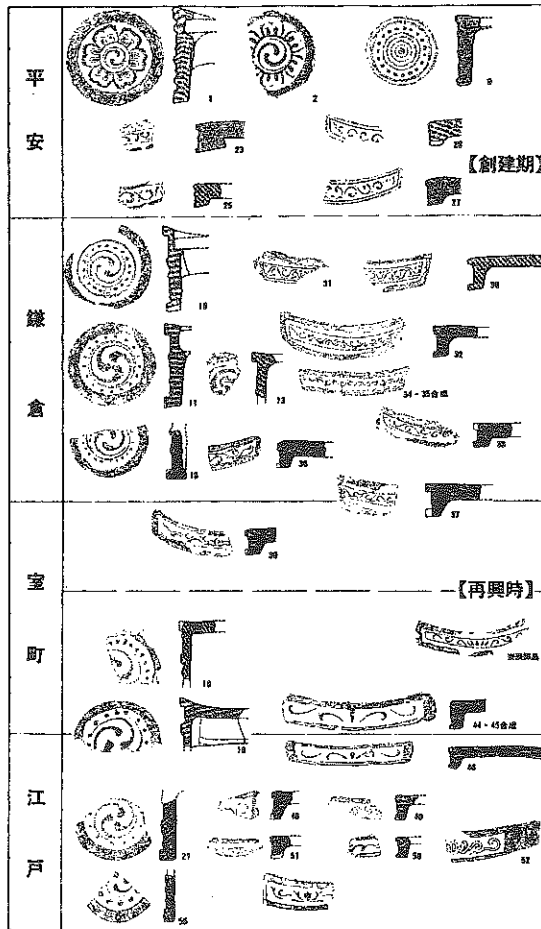
それでは『勸進状』が記す七間四面の規模を有する堂は、誇張表現であって実際には存在しなかったのであろうか。想定できる平坦面が仏堂跡S B 3401の北隣山丘部にある。その平坦面は南北方向に細長く現在茶畑として利用されていて判然としないが、しかしその周囲には瓦が比較的多く表採され、その周囲眼下にも平坦面が展開し、それらにも堂舎の存在が想像できる。仮に七間四面の仏堂がこの平坦面にあるとすれば、正面が西向きの建物となろう。薬師堂であろうか。当地周辺は、前述の園池中心の空間とは異なり、西方向に開けた空間構成となっている。このエリアはほとんど調査ができていない。今後急務となる課題である。



第48図 検出遺構の時期的変遷図 (アミ部分が検出地点)



第49図 出土遺物の時的期的変遷図 (アミ部分が出土地点)



第50図 出土軒瓦編年試案

創建期軒瓦は、平等院と同範の河内向山系である。平等院では鳳凰堂がこの修理によって総瓦葺きになる程の大規模なものであり、河内向山瓦窯から平等院領玉櫛荘を介して搬入されたとされる。宇治ではよく出土し、平安後期（院政期）の宇治を象徴的に示す瓦である。創建当時の白川金色院は「別所」として成立していた。別所にはその本寺とされる寺が付近にあり、今のところ平等院である可能性が高い。藤原摂関家が主導した平等院を中心とする当該期宇治の宗教的世界観を理解してはじめて白川金色院の実相にせまり得ることができよう。

鎌倉時代 文献では平安時代同様ほとんどうかがい知れない。『明月記』元久元年(1204)11月25日条に、九条良経が宜秋門院任子らと訪れたとみられるのみである。遺構の広がりや平安時代の状態とほぼ同じである。出土遺物でみれば前代と比較して2点の差異が指摘できる。

まず軒瓦についてであるが数量が多くなり、当該期の平等院瓦とは様相が異なり、東福寺との同範瓦がみられることである。新堂舎建築に伴う瓦供給なのか、もしくは改修に伴うものなのかは判断できないが、いずれにしろ創建期と瓦供給のあり方には変化がみられる。

もう1点は遺物の出土範囲である。出土範囲は拡大し、坊院想定平坦地の最北部と最南部にまで広がりを見せ、土器などの日常生活品が出土する。瓦出土地は前代とさほど変化が認められない。以上のことから鎌倉時代には数多くの坊院が形成され、中世的寺院として発展していったと考えられる。ただし遺物量や出土地点数から次の室町時代程には坊院形成はなかったと思われる。いずれにせよ、なお当該期に創建期である平安後期とは全く異なった風景がそこにはみられる。

九重石塔を囲む五輪塔の一部が後半期頃から造られ、鎌倉末期には九重石塔と現白山神社拝殿が造立された。詳細な実態までは踏み込めないものの、比較的活発な活動があったものと思われる。

室町時代 『勸進状』によれば、長祿4年(1460)に盗火にあって寺が焼失した。この復興のため、3年後の寛正4年(1463)にこの『勸進状』は作成された。復興は順調に進んだようで、『後法興院記』応仁元年(1467)条には、近衛房嗣・政治家父子が度々訪れ、所々の庭を見物したとある。ここに記された所々の庭とは、各坊院がもつ庭園のことであろうから、この段階ですでに数多くの坊院が存在していたことが推察される。その一つが平成6年度に検出した坊院跡であろう。雛

段造成によるもので地形的制約を受けつつも効果的に空間利用して造成が行われていた。平成7年度・平成13年度2カ年に、平成6年度坊院が位置する棚田上に複数のトレンチを設定し、平坦面の調査をしたところ、いずれもが当該期における雛段造成で、おそらく坊院造営に伴うものであったと推察された。この段階の造成がそれまでの白川の景観を大改変させる規模のものであったと考えられる。平成5年度の調査でも同様のことが確認され、北部も含めて比較的広範囲にわたり、後に「白川十六坊」と総称されるような数多くの坊院がこの時に形成されたのであろう。白川金色院全盛期ともいえる。再興を可能にした要因が何か判然としないが、同時代における平等院・浄妙寺の状況とは全く異なった現象である。

なお平成7年度に検出された鍛冶関係遺構はこの復興期に比定できるのかもしれない。

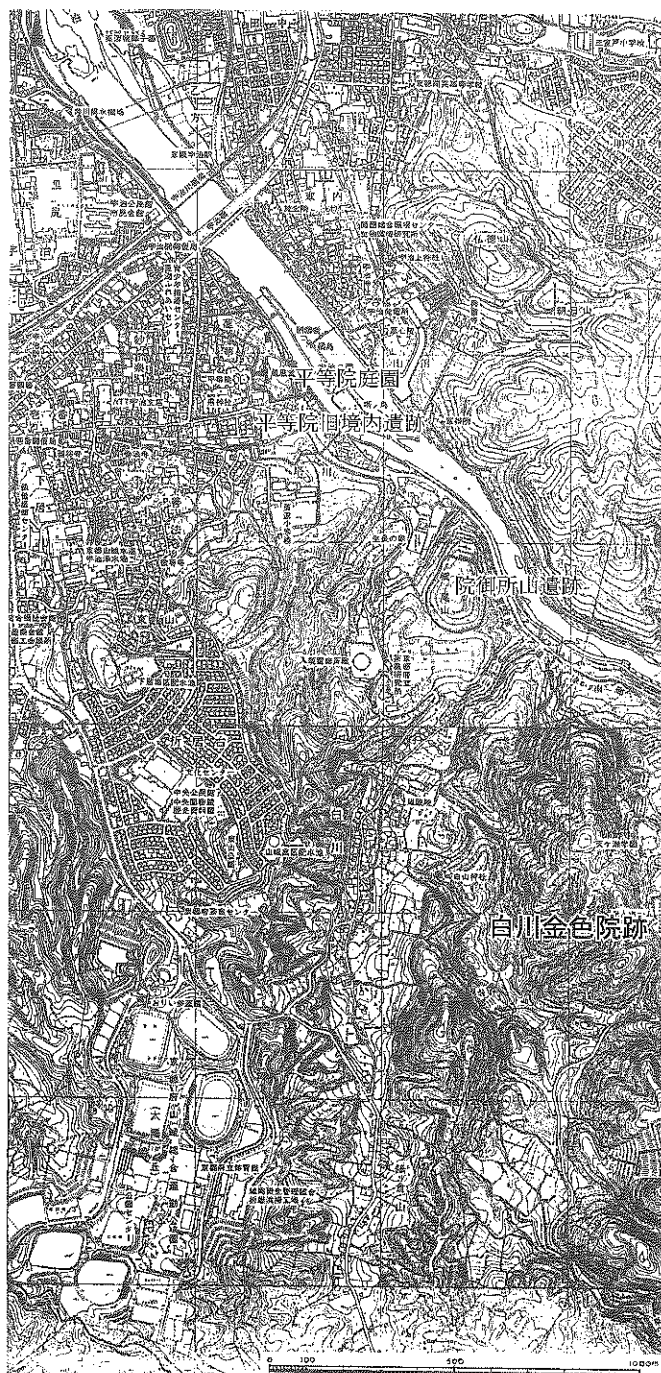
文献では室町後半期に、連歌師宗長が辻坊で連歌会をしばしば行っていたことがわかる。また現在の惣門や地藏院がこのころに造立された。

江戸時代 遺構的には土壇や溝等といった小規模なものが多く、堂舎の実態にせまれる程の成果はない。また前代のような造成はみられない。遺構としては閼伽井跡が唯一その全容を把握できるだけである。出土遺物は、前代同様広範囲に及ぶものの極めて少量である。

発掘成果では定かにできないが当該期は文献が比較的良くのこり、中期には3坊、後期には2坊となった有様がみえ、次第に衰退していく様子がうかがえる。

明治時代 初年の廃仏毀釈によって廃寺となり、わずかな建物を残して大半が遺跡として残されることとなった。

現在残る寺跡の景観は、以上のことから室町中期再興時に形成されたと理解される。



第51図 白川金色院跡想定寺域

2、遺跡の範囲と今後の課題

遺跡の範囲については、第Ⅱ期5カ年計画発掘調査の中で随時説明した。第51図は遺物の出土地点をもとに、検出遺構をその上に重ね合わせて諸々の要素を鑑みて寺域を想定したものである。ただしこれはあくまでもこの寺の中心域を示すものでしかない。平成11年度の上明地区の調査や白川盆地北西部の院御所山遺跡などにみられるように、周辺部には白川金色院跡と関連が想定されるところがある。今回の発掘調査事業計画では、これらを対象範囲からあえて外した。あまりにも広域にわたり、収拾のつかなくなることを危惧したためである。白川盆地は、平等院周辺のいわゆる俗世から離れた山間地域で、閉鎖的な空間である。このことが別所という性格をもつこの寺を育む重要な要因であったことは想像に難くない。こうした点も寺の本質的な範囲を考えるうえで重要である。これらの諸課題については将来に残しかかげておきたい。

最後に平成5年度から平成14年度までの10年間もの長きにわたって温かく見守り、そして絶えず応援して下さい。地元白川区民の皆さんに心より深く感謝したい。そしていつも厳しい発掘調査の中で日々苦勞をともにし助けてくれた学生諸君にも心より深く感謝したい。

【主要参考文献】

- 宇治市教育委員会 「白川金色院跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第1集（1982）
- 宇治市歴史資料館 『宇治文庫6 宇治をめぐる人々』（1995）
- 『「白川金色院」と恵心院』（1998）
- 京都府編 「白河金色院」『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊（1925）
- 湖西市教育委員会 「大知波峠廃寺跡確認調査報告書」『湖西市文化財調査報告』第37集（1997）
- 「湖西連峰の信仰遺跡分布調査報告書」『湖西市文化財調査報告』第40集（2002）
- 高木豊 「院政期における別所の成立と活動」『平安時代法華仏教史研究』（平楽寺書店 1973）
- 中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』（1995）
- 清水廣 『平安時代仏教建築史の研究』（中央公論美術出版 1992）
- 杉本宏 「平等院古瓦の新相—河内系軒瓦の様相・年代・背景—」『平安京歴史研究』（1993）
- 「棧瓦考拾遺」『藤沢一夫先生卒寿記念論文集』（2002）
- 濱島正士 「湖東の密教寺院—西明寺と金剛輪寺」『日本名建築写真選集7 西明寺と金剛輪寺』（新潮社 1992）
- 浜中邦弘 「宇治白川金色院の平安時代—発掘調査からの試み—」『古代文化』第51巻5号（1999）
- 文化庁監修 「鶴林寺太子堂」『国宝13 建造物I』（毎日新聞社 1984）
- 増淵徹 「藤原寛子とその時代」『京都の女性史』（思文閣出版 2002）
- 宮小路賀宏 「武蔵寺第11号経塚発掘調査報告」『古文化談叢』第12集（1983）
- 村木二郎 「近畿の経塚」『史林』第81巻2号（1998）
- 山岸常人 「文化遺産の現代的意義」『日本歴史』356号（1978）
- 『中世寺院社会と仏堂』（塙書房 1990）

白川金色院跡経塚出土の和鏡について

奈良大学大学院 清水 梨代

宇治市教育委員会の御好意により、宇治市白川金色院跡経塚関連遺構 S X 5501より出土した和鏡 2 面（秋草蝶鳥鏡・山吹双鳥鏡）の自然科学的調査を行う機会を得た。ここにその報告を行う。

A. 調査方法

本調査を行うにあたって以下のような手法を用いた。

- (1) 肉眼観察
- (2) X線透過写真による観察

【撮影条件】

電圧：(秋草蝶鳥鏡) 130kv (山吹双鳥鏡) 110kv 電流：5 mA

距離：1 m 時間：1分 フィルム：富士 I X 80

- (3) エネルギー分散型蛍光 X 線分析器による元素分析¹⁾

【測定条件】

奈良大学文化財学科保存科学研究室設置

㈱エダックス・ジャパン製 エネルギー分散型蛍光 X 線分析器 (イーグル号)

電圧：38kv 電流：500 μ A 測定時間：300秒 管球：クロム

コリメーター：0.1mm 測定環境：真空

B. 秋草蝶鳥鏡

- (1) 肉眼観察

非常に精良な鑄上がりの金属質な銀色光沢を呈するいわゆる白銅鏡である。鏡式は花蕊座素円



第52図 秋草蝶鳥鏡 (●が分析箇所)



第53図 山吹双鳥鏡（●が分析箇所）

鈕と非常にそりたってシャープな中線単圏の界圏をもつ中縁直角鏡²である。また、外区が内区よりやや厚い古式な要素を残している。鏡背には、やや肉高な籠押しで鈕や界圏を無視した1枚の画布としての文様構成が描かれている。なお、鏡面の右下から左上にかけて緑青錆と赤色の錆が発生している。

(2) X線透過写真による観察

左半分に鬆がやや多く見受けられるものの、ひび一つ入っていない非常に状態の良好なものであることがわかった。

(3) 元素分析

分析箇所は鏡面5カ所、鏡背1カ所の計6カ所である(第52図)。元素分析の結果主成分として銅(Cu)、錫(Sn)が微量成分として鉛(Pb)、砒素(As)、銀(Ag)、アンチモン(Sb)、水銀(Hg)が検出された。なお、鏡面の赤色の錆部分からは銅(Cu)と錫(Sn)が検出され、その成分比率からあきらかに銅(Cu)に起因する錆であることが判明した。

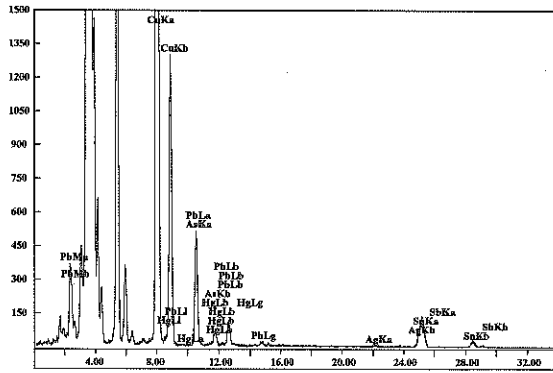
C. 山吹双鳥鏡

(1) 肉眼観察

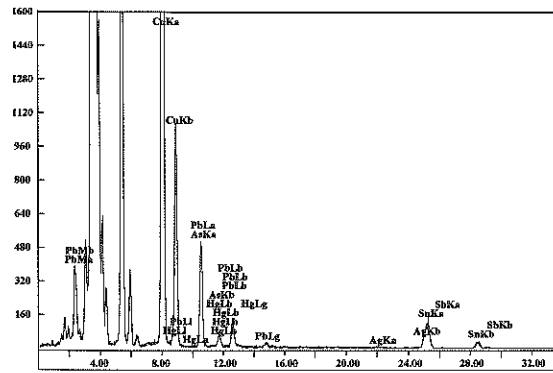
鏡背は灰緑褐色、鏡面はやや黒味を帯びた金茶色を呈する良質な鑄上りの和鏡である。鏡式は振菊座截頭円鈕と中線単圏の界圏をもつ細縁外傾鏡である。文様はややシャープな籠押しで、秋草蝶鳥鏡とは対照的に山吹、蝶鳥を正三角形に配するという非常に特徴的な文様構成を描いている。なお、対角線上の右上と左下の周縁の一部が欠けており、界圏にもやや乱れが生じている。また、鏡面の対角線上の右上と左下(周縁の欠けと界圏の乱れに対して交わる)には錆が生じている。

(2) X線透過写真による観察

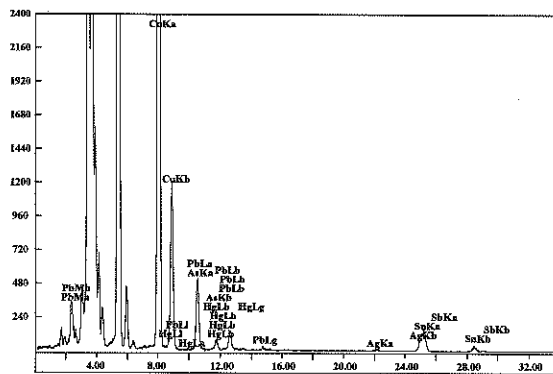
全体的に非常に鬆が多く(特に左半分)、所々に鑄ムラも見受けられるものの、ひび一つない非常に良好な状態のものである。湯口であるが、鑄ムラや界圏の乱れ等から、右上に湯口が左下



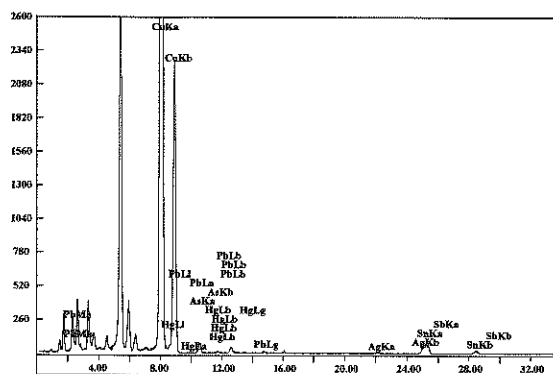
【Spec. 1】鏡面左 (1)



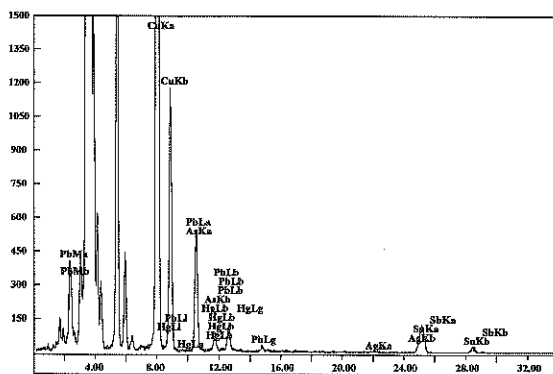
【Spec. 2】鏡面上 (2)



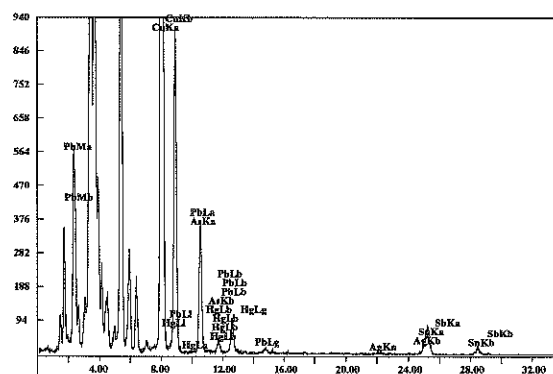
【Spec. 3】鏡面中央 (3)



【Spec. 4】鏡面下 (4)



【Spec. 5】鏡面右 (5)



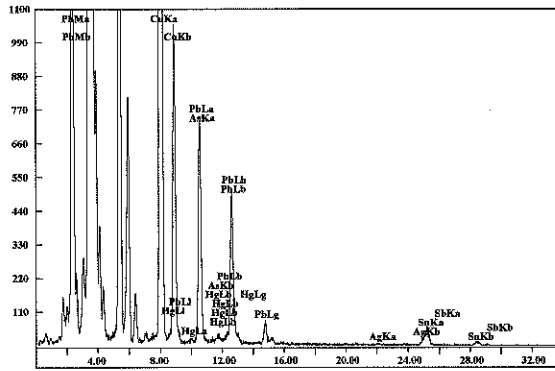
【Spec. 6】鏡背 (6)

【表 2】 秋草蝶鳥鏡の蛍光X線強度

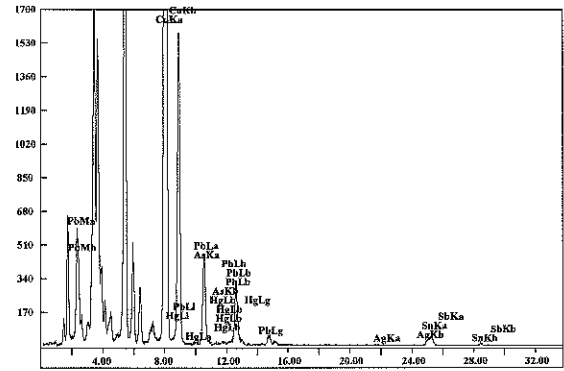
(cps)

分析箇所	銅(Cu)	錫(Sn)	鉛(Pb)	砒素(As)	銀(Ag)	水銀(Hg)	アンチモン(Sb)
1 (鏡面)	407.14	349.60	39.76	0.10	0.36	0.13	0.00
2 (鏡面)	324.19	333.44	35.56	8.06	0.27	0.23	0.03
3 (鏡面)	320.17	275.90	32.56	1.49	0.16	0.24	0.03
4 (鏡面)	766.89	12.30	12.57	0.00	0.36	0.16	0.06
5 (鏡面)	365.38	355.09	43.19	0.98	0.29	0.22	0.08
6 (鏡背)	271.06	111.75	38.31	0.00	0.15	0.29	0.00

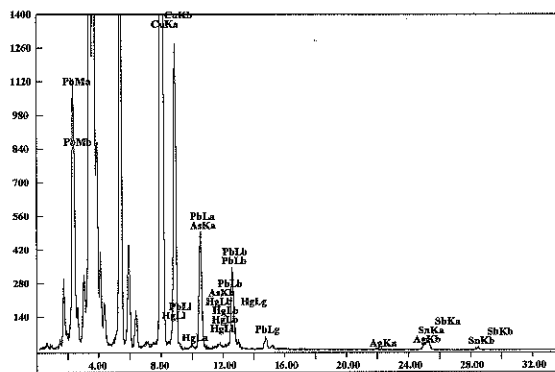
* cpsは毎秒あたりのX線量 (カウント/秒) (=counts per second)



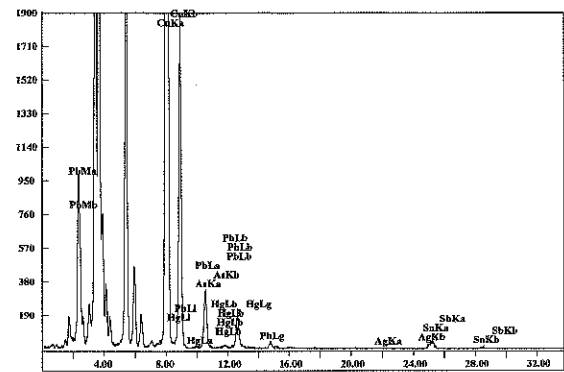
【Spec. 7】鏡面左 (7)



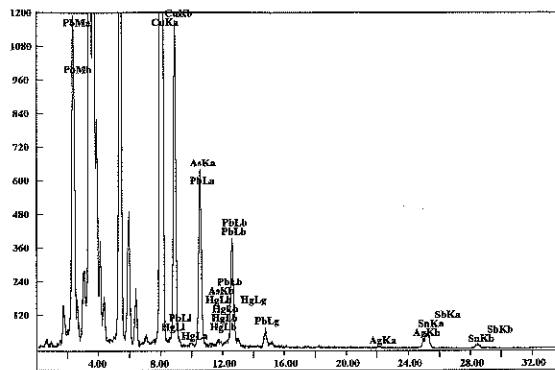
【Spec. 8】鏡面上 (8)



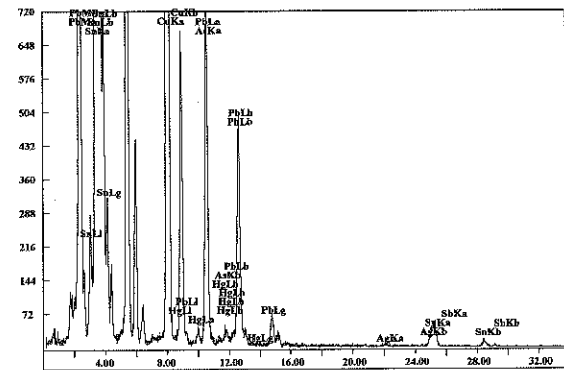
【Spec. 9】鏡面中央 (9)



【Spec. 10】鏡面右 (10)



【Spec. 11】鏡面下 (11)



【Spec. 12】鏡背 (12)

【表3】 山吹双鳥鏡の蛍光X線強度

分析箇所	銅(Cu)	錫(Sn)	鉛(Pb)	砒素(As)	銀(Ag)	水銀(Hg)	アンチモン(Sb)
7 (鏡面)	324.08	195.34	94.79	0.00	0.19	0.70	0.04
8 (鏡面)	483.35	75.16	45.04	0.07	0.28	0.74	0.06
9 (鏡面)	411.37	199.35	68.77	0.38	0.23	1.00	0.08
10 (鏡面)	554.21	170.09	52.26	0.00	0.07	0.51	0.05
11 (鏡面)	366.38	182.24	80.80	0.00	0.40	0.48	0.07
12 (鏡背)	203.91	154.82	87.67	0.00	0.33	1.37	0.04

に揚がりがあった（ただし、揚がりがない場合は左下に湯口がくる）ものと推測される。

（3）元素分析

分析箇所は鏡面5カ所、鏡背1カ所の計6カ所である（第53図）。元素分析の結果、主成分として銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)が、微量成分として銀(Ag)、アンチモン(Sb)、水銀(Hg)が検出された。

D. 考察

以上から次のようなことが推察される。

- （1） 錆上からの定性分析ではあるが、秋草蝶鳥鏡の組成が白銅すなわち高錫青銅³であるのに対し山吹双鳥鏡は一般的な青銅であり、明らかにその材質に大きな差異がみられる。
- （2） 明代の技術書『天工開物』に「日本に産する銅には銀の母岩に包まれているものがある。これは炉に入れて精錬するとき、表面に銀が集まり、銅は下に沈む。商船によって中国に運ばれてくるものを日本銅という。」という記載があり、これから考えると少なく見積もっても南蛮吹きが入ってくるまでの日本産の銅にはごく微量の銀が不純物として含有されていたことがうかがわれる。また、時代はやや古くなるが淳和院⁴で操業されていた鑄造遺構（9世紀?）から出土したスクラップ及び金属粒の分析でも砒素と銀が微量に含有されており、さらには長登銅山の鉱石や東大寺の鑄造遺構出土のスクラップでも同様の結果⁵が示されていることから、日本産の銅には不純物として銀や砒素が含有されていたものと考えられる。以上のことから、秋草蝶鳥鏡も山吹双鳥鏡も少なくとも国産銅と輸入により入ってきた銅（主に中国か?）をあわせた材料を使用していた可能性が考えられる。
- （3） 科学分析の結果、秋草蝶鳥鏡、山吹双鳥鏡の双方の鏡面だけでなく鏡背からも水銀(Hg)が検出されており、この2面の鏡には全体的に水銀を用いた鏡磨き⁶が行われていたものと考えられる。
- （4） 文様で類型を図ることはとても困難である。和鏡の製作技法や鑄造実験などからかんがみると、挽型⁷を用いて径を作っている以上、径の大きさや縁幅、縁高はこの挽型によって左右されるはずである。この挽型から各製作主体ごとの規格を導き出すことができるものと思われる。
- （5） 秋草蝶鳥鏡と和歌山県橋本市隅田八幡神社経塚出土流水草花双鶴鏡は、科学組成において双方とも高錫青銅という非常に近い数値を示しているだけでなく、肉高な篋押し、鏡式（縁幅、径、鈕座型）の一致から同一系統の工房で作られた可能性が極めて高い。また、科学分析は行っていないため、その組成については断定できないがいわゆる白銅鏡であり、肉高な篋押しと同一規格の鏡式（中縁直角鏡で花蕊座の鈕座と中線単圏の界圏をもち外区が内区より厚い古式な要素を持つ）を持つ三重県多度町多度神社経塚出土佛桑花蝶鳥鏡、菊山吹蝶鳥鏡も秋草蝶鳥鏡と同一系統の工房で作られた可能性が高いと考えられる。

謝辞

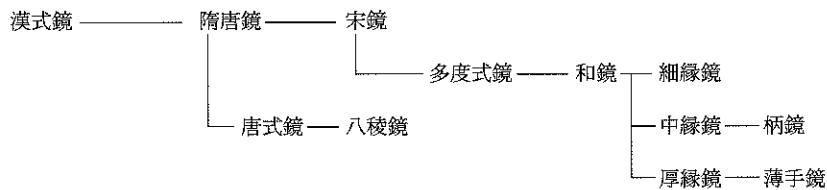
本稿を書くにあたり、前田洋子先生、水野正好先生、西山要一先生をはじめ、以下の方々には数多くの御助力、御教示を頂いた。末筆になりますが深く御礼申し上げます。(敬称略 五十音順)

石神教親・井口喜晴・植田直実・大岡康之・久保智康・菅井裕子・田中久生・成瀬正和・平尾良光・古川毅

【註】

¹ 試料を採取せず、非破壊で測定できることを最優先で考えたため、エネルギー分散型蛍光X線分析器による定性分析を採用した。なお、この方法で出土資料の調査を行う場合は、X線の照射された範囲内の表面的な組成情報しか得られず、必ずしも資料全体の組成を反映しているとは限らないため、錆の影響や製造過程で素材そのものに偏析の可能性があることなどに十分な考慮をしたうえで結果を評価する必要がある。

² 和鏡とは一般的に日本で作られた「日本的な文様意匠の鏡」を指す。しかし現実的には「純粹和様の鏡」ではなく、中国的要素の絶えざる参照過程により成立（たとえば多度式鏡に見られる宋鏡の鏡式の採用や宋画の影響）し、そこに日本独自の要素（鈕座を花形に作り、高く直立した周縁と界圏がめぐる鏡胎形式・砂型、篋描（スタンプも含む）による一范一鑄による製作）が加わったものをいう。



³ 一般的にいう青銅とは銅(Cu)と錫(Sn)の合金のことを指すが、文化財資料における青銅とは銅(Cu)・錫(Sn)・鉛(Pb)合金のことを指す。

⁴ 「9世紀前半の平安京で使用された砒素を含む銅材料について—淳和院出土遺物を中心として—」(日本文化財科学会『日本文化財科学会第19回大会要旨集』2002)、また(成瀬・岡田1997)を参照。

⁵ (成瀬1999)を参照。

⁶ 鏡磨きとは、鏡面を鍍やきさげなどで平らに削り、砥石で下磨きをし、更に硬質の朴炭、軟質の駿河炭を用いて炭研ぎを行い、酸気を持つかたばみ草の汁で鏡面を洗い、その後水銀と錫を合わせたものを塗る(=鍍錫)工程をいう。

⁷ 挽型とは鑄鏡の鑄型を作成するときに用いられる道具の一つである。原理としてはコンパスと同じであり、面径や周縁、界圏を作成するのに用いられる。

【参考文献】

大野勝美・川瀬晃・中村利廣編 『蛍光X線分析法』(共立出版株式会社 1987)

久保智康『日本の美術 394 中世・近世の鏡』(至文堂 1999)

杉山洋『日本の美術 393 古代の鏡』(至文堂 1999)

宋應星撰・藪内清訳注『天工開物』(東洋文庫130 平凡社 1969)

- 中野政樹『日本の美術 42 和鏡』(至文堂 1969)
- 成瀬正和「正倉院を中心とした唐式鏡の科学的研究」(杉山洋『日本の美術 393 古代の鏡』至文堂 1999)
- 成瀬正和・岡田文男「平安時代後期出土美術工芸品の材質的研究」(鹿島美術財団『鹿島美術研究 年報第11別冊』1997)
- 橋本市教育委員会『隅田八幡神社経塚発掘調査概報』(1998)
- 早川泰弘・平尾 良光「各種の蛍光X線分析装置による文化財資料の分析」(東京国立文化財研究所『保存化学No. 37』1998)
- 平尾良光 編『古代東アジア青銅の流通』(鶴山堂 2001)
- 広瀬都巽『和鏡の研究』(角川書店 1974)
- 前田洋子『日本の古鏡—女装美のプロデューサー—』(大阪市立博物館 1985)
- 美東町・美東町教育委員会『古代の銅生産—古代の銅生産シンポジウムin長登 資料集—』(2001)
- 村上隆「蛍光X線分析における諸問題」(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター『保存科学研究集会 2000 非破壊手法による考古資料の分析』2000)
- 雄山閣『季刊考古学 古代・中世の銅生産』第62号 (1998)

白川金色院跡出土の有機質遺物の調査

榎吉田生物研究所 本吉 恵理子

宇治市教育委員会による数年にわたる白川金色院跡の発掘調査で出土した有機質遺物について、材質調査の便宜を同教育委員会にはかっていたので、その結果を以下に報告する。今回調査した有機質遺物とは具体的には漆製品と炭化材であり、漆製品についてはその断面構造の観察を、炭化材については樹種同定を目的とした。

A. 漆製品の調査

(1) 資料

今回調査した漆製品は表 4 に示す 6 点で、便宜上資料 No. を付した。

表 4 調査資料一覧

No.	資 料	調 査 次 数	出 土 遺 構	資 料 の 概 要
1	漆塗り木製椀	白川金色院跡 1 次	S K1103	黒色漆地上に赤色の漆で文様が描かれる。見込みに漆様の物質が溜まった状態で固まっている。見込みの木地上の漆膜と漆様の物質が密着した部分から試料を採取した。
2	漆膜付着金箔	白川金色院跡 3 次	S K3403	土の塊に金箔が付着した状態。金箔の裏側に茶色い漆様の膜がみられる。
3	漆 膜 片	白川金色院跡 5 次	S X5501	光沢のある褐色の漆膜片。土圧により折れ曲がった状態で漆膜のみが残存している。漆膜が数枚重なっているが互いに剥離している状態。
4	漆 膜 片	白川金色院跡 6 次	6-6 トレンチ 焼土層	こげ茶色を呈する漆様の破片。No. 3 のような光沢はない。
5	漆 膜 片	白川金色院跡 7 次	——	土の塊に明赤色の漆膜が付着した状態。
6	漆 膜 片	白川金色院跡 7 次	7-13 トレンチ	石臼の破片の表面に塗布された漆膜。上面と側面の 2 箇所から試料を採取した。

(2) 調査方法

以上のような資料本体について、可能なかぎり塗膜構造の良好な部分を選び、数mm四方の破片を採取した。採取した試料はエポキシ樹脂に包埋して研磨して、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。そして透過光ならびに落射光の下、光学顕微鏡（Nikon製 OPTIPHOT-2）を用いて観察した。

(3) 観察結果

断面観察結果の概要を表5にまとめる。

表5 断面観察結果表

No.	資 料	調査部位	塗 膜 構 造 (下層から)	
			下 地 構 成	漆 層 の 構 成 (下層から)
1	漆塗り木製椀	見込み	? + 炭水化物	透明漆層/赤色漆層 (文様部) / 漆様物質
2	漆膜付着金箔	——	——	透明漆層/金箔
3	漆 膜 片	——	——	(天地は不明) 透明漆層2層/透明漆層(繊維を含む) / 透明漆層
4	漆 膜 片	——	——	(天地は不明) 透明漆層/透明漆層 (繊維を含む)
5	漆 膜 片	——	柿渋+木炭粉	透明漆層/赤色漆層
6 上面	漆 膜 片	——	漆+砥の粉	漆+墨/透明漆層2~3層
6 側面	漆 膜 片	——	漆+砥の粉	漆+墨/透明漆層

No. 1

下地：淡褐色の漆層の下面に黒色の小さな塊がみられる。これらは炭化物である。ただし、層が薄いため、膠着剤は不明である。

透明漆層：淡褐色で均質な透明漆層が1層みられる。

赤色漆層：漆に混ぜられた赤色顔料は、粒子の形状から朱と判断する。

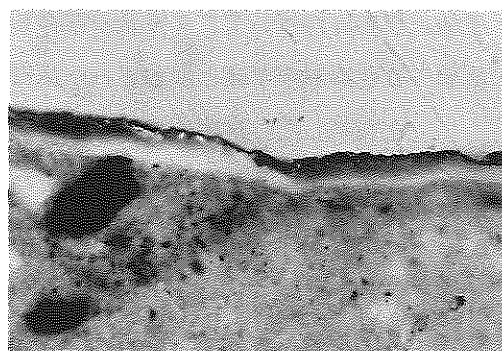
漆様物質層：椀本来の層構造の上に、漆様の淡黄褐色の厚い層がみられる。この物質は色から漆と判断される。透過光下では、この層

中の特に上部に多数の黒色細粒が観察される。一見すると微細な黒色顔料のようであるが、落射光下で観察すると黒色の粒子ではなく、透明の細かな気泡であることがわかる。



第54図 No.1 塗膜断面 (×100)

No. 2：土がついたままの状態ではエポキシ樹脂に包埋し、断面を観察した。ほとんどが土であり、その表面にきわめて薄く線状に光る部分が金箔層で、土の鉱物と金箔層の間にはさまれた褐色の薄い層が漆層である。なお胎はずでに腐朽しており残存していない。



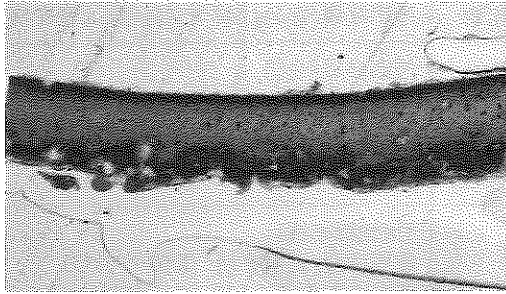
第55図 No.2 断面 (×200)

No. 3：サンプリング時に4枚の塗膜に分離したので、重なるの順に①～④の番号を付した。

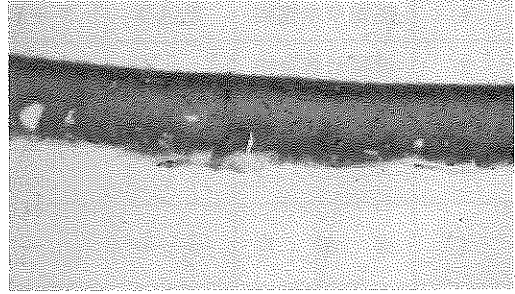
①・②・④：透過光下では黒色に見える気泡がそれぞれに確認できるが、特に①と②に多い。

またそれぞれの片側の表面が平坦であることが共通している。

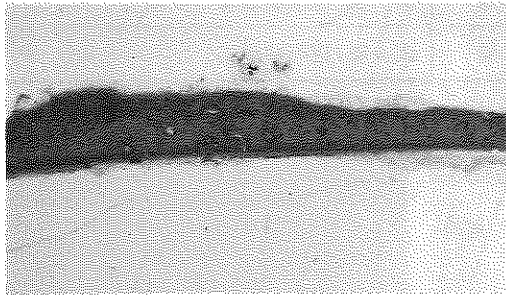
- ③：この塗膜は、ほかの塗膜と同じく淡褐色を呈して気泡を多数含む部分と、淡褐色の中が横方向に細く白く抜けた部分とに分けられる。この白く抜けた部分の方向はほぼ一定であり、大きさや形状から繊維であると判断できるが、単位や撚りは認められないことから、紙の繊維であると推定される。繊維と繊維の間に漆が十分にしみ込んでいる状態が観察できる。



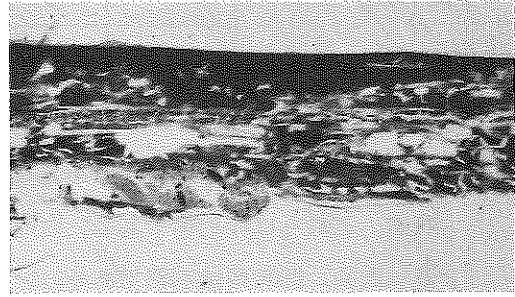
第56図 No. 3 ①断面 (×100)



第57図 No. 3 ②断面 (×100)

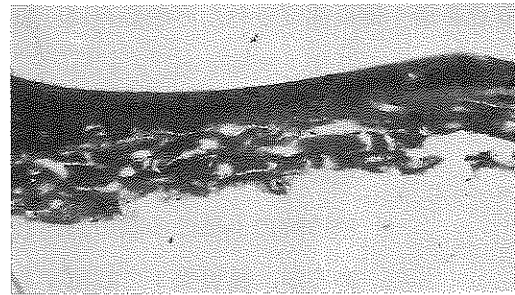


第58図 No. 3 ④断面 (×100)



第59図 No. 3 ③断面 (×100)

- No. 4：先のNo. 3の③と同様に、褐色の部分と褐色の中が横方向に細く白く抜けた部分とに分けられる。白く抜けた部分の方向はほぼ一定で、単位や撚りは認められないことから、これも紙を構成する繊維と推定される。紙の繊維と繊維の間に漆が十分にしみ込んでいる。

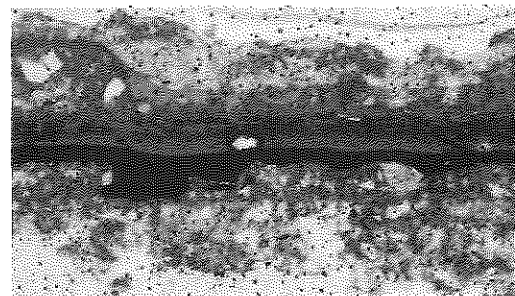


第60図 No. 4 断面 (×100)

No. 5

- 下地：漆層に付着してごく少量が残存している。木炭粉と茶褐色の柿渋からなる渋下地である。
漆層：赤色漆層中で漆と混和された顔料は、顕微鏡下での色調と形状の観察により、ベンガラと判断した。透明漆層の上面は幅をもって褐色に変色しており、劣化している。

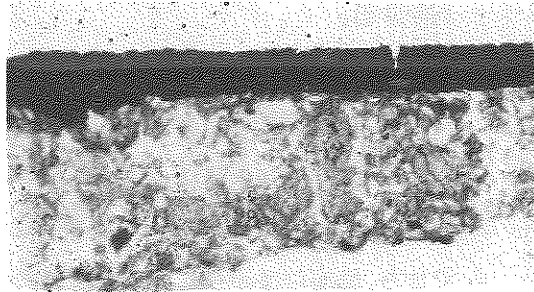
- No. 6 上面：下層から、下地A、漆層3～4層、下地Bが確認できる。下地Aと漆層がオリジナルの構造で、下地Bは塗りなおすと判断する。下地はともに漆と砥の粉を混ぜたものである。漆層は、墨と漆を混ぜた



第61図 No. 6 上面の断面 (×100)

層、透明漆層が2～3層みられる。この透明漆層のうち最下層の上面は層向と垂直に大きくV字形に割れている。その隙間に上層の透明漆が入り込んでいるのが観察されるので、劣化による損傷だとすれば、上層の透明漆は塗りなおし時に塗布されたものであろう。なお、塗りなおしの下地はこのころが、漆層は残存していない。

No. 6 側面:下層から、石臼の素地の石、下地、漆層が2層確認できる。この写真は上面がこげ茶色の部分である。下地、漆層とも石臼の上面と同じ構造である。ただし、漆層は墨と漆を混ぜた層と透明漆層1層のみである。これは、オリジナルのみが残存している部分と判断される。



第62図 No. 6 側面の断面 (×100)

(4)まとめ

今回は漆椀1点、石臼1点、性格不明の漆膜片4点とさまざまな資料を調査した。そこで資料1点ずつの観察をまとめ、考察にかえる。

No. 1:本来什器として使われていた木製漆椀が、漆工具として転用されたものである。オリジナルの漆椀の塗膜構造は、炭化物を含む下地の上に透明漆1層、その上に文様部の赤色漆1層というものであった。下地の膠着剤については色調が観察できなかったので確定はできないが、このような構造をとる漆椀では下地に膠着剤として漆を使用したものよりは、柿渋を用いたもののほうが多いので、本例についても柿渋に炭化物を混和した炭粉渋下地が施されている可能性が高い。文様部の赤色漆は漆に朱を混和した朱漆であった。

椀にたまった漆は多数の気泡を含んでおり、層の上面は平滑ではなく、波打っている。層の中ほどにも細かな気泡が多数含まれている。このような漆層の状況は、漆が採取されて夾雑物が除去された後におこなわれる、漆の精製工程のひとつ「なやし」工程が十分におこなわれていないことを示しており、その層中の漆が精製度の低い、生漆により近い状態であることがわかる。「なやし」工程とは、具体的には夾雑物を除去しただけの生漆に含まれる気泡を抜き、均質にするために十分に攪拌するという工程である。

以上のことから、精製度の低い漆を使う漆塗り工程において、漆容器あるいはパレットとして使用されたものと考えられる。

No. 2:胎は残存しているが、何らかの胎に箔押しするための接着用の漆層と、貼られた金箔が観察された。仏像に関連する遺物かと考えられる。

No. 3:剥離した漆層のみが4層残存している。その中には紙の繊維が含まれる層も認められた。この紙のみが胎を形成していたと考えるよりは、何らかの胎の上に紙が貼られ、漆が塗布

されたものの、下層にあった胎が腐朽したとするほうが妥当であろう。2顆の数珠玉が漆膜にはさまれた状態で出土したので、念珠箱として使用されていた可能性がある。

No. 4 : 漆層のみが残存している。その漆層の中に紙の繊維が含まれていた。比較的均質で上面が平滑な漆層が1層のみである点から、漆塗膜の一部であり、下層にあった胎が腐朽したものと判断する。

No. 5 : 胎は腐朽している。柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地の上に、透明漆1層と漆にベンガラを混和した赤色漆1層が重なるという塗膜構造は、中世の木製漆碗の塗膜構造に多数見られるもので、本例も木製漆碗の塗膜断片であろう。

No. 6 : 石臼の上面と側面に施された漆膜である。上面にはオリジナルの塗装と補修の塗装が確認できた。側面にはオリジナルの塗装のみがみられた。上面と側面のオリジナルの塗装は同様の構造で、漆に砥の粉を混和したサビ下地の上に、墨と漆を混ぜた黒漆と透明漆1層と重なるものであった。この石臼の上面と側面のオリジナルの透明漆層には、層方向と垂直にV字形の溝が入っている。これらは劣化によるもので、長期間の使用を示している。

石臼の上面にはオリジナルの塗装の上に、補修時の塗装が一部残存している。その塗膜構造は漆層が剥離したものが残存しておらず下地のみであるが、オリジナルの塗装の下地と同じくサビ下地であった。

漆塗りの石臼というと茶臼の可能性が高い。一部に補修の塗りなおしがみられることから、当時大切に使い込まれたことがうかがえる。

B. 炭化材の調査

(1) 資料

今回調査した炭化材は表6に示す3点で、これも便宜的に資料No.を付す。

表6 炭化材調査資料一覧

No.	資料	調査回数	出土遺構	資料の概要
1	炭化材	白川金色院跡5次	S K5503	土壌の埋土に混じていた炭化材。芯持ちで直径3.0cmに満たない細いものが多い中から比較的大きな3点をピックアップした。
2	炭化材	白川金色院跡5次	S K5503	
3	炭化材	白川金色院跡5次	S K5503	

(2) 調査方法

S K5503からは細かな炭化材が多数出土した。これらは土壌中に混在していた。その中からピックアップした比較的大きな炭化材3点を、それぞれさらに細かく分割してエポキシ樹脂に包埋した後研磨して、木口(横断面)・柁目(放射方向)・板目(接線方向)の木材3方向の薄片プレパラートを作製した。そして透過光の下、光学顕微鏡(Nikon製OPTIPHOT-2)を用いて観察して同定した。同定に際しては、島地・伊東(1988、1982)を参考にした。

(3) 観察結果

No. 1・2: 早材から晩材への移行が急な針葉樹である。年輪界近くに大きな樹脂細胞が存在する。所々の細胞に薄い茶色～こげ茶色の物質が詰まっているが、単なる汚れで、この細胞は樹脂細胞ではない(木口面)。

上方と中央の横方向に走る放射組織の上下両端にある放射仮道管の内壁には内腔に向かって鋸歯状の突起がみられる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である(柾目面)。

放射組織は単列で、ほぼ1～10細胞高である(板目面)。

以上から、No. 2・3はマツ科マツ属(二葉松類)であると判断する。マツ科マツ属(二葉松類)にはアカマツ、クロマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

No. 3: 環孔材で、道管は単独で存在する。孔圏部のいくつかの道管には茶色いチロースがみられる。小道管の壁厚は薄く形は角張る(木口面)。

所々にみえる太くぬけた白い部分が道管であるが、単穿孔を持つ。放射組織はすべて平伏細胞からなり、同性である(柾目面)。

プレバートが少し厚いため見づらいが、数珠状に放射組織が1列に並んだ単列放射組織と、幅広で長い広放射組織(中央右寄り)の両方が存在する(板目面)。

以上からブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節と判断する。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

表7 炭化材樹種同定表

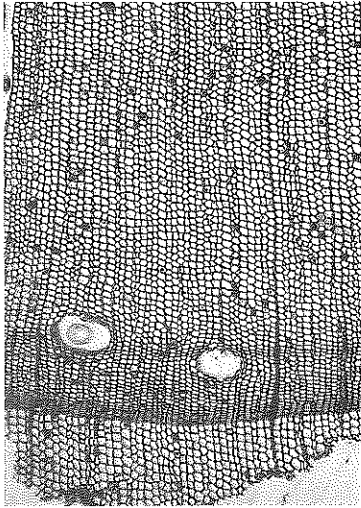
No.	資料	調査回数	出土遺構	樹種
1	炭化材	白川金色院跡5次	S K 5503	マツ科マツ属(二葉松類)
2	炭化材	白川金色院跡5次	S K 5503	マツ科マツ属(二葉松類)
3	炭化材	白川金色院跡5次	S K 5503	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節

【参考文献】

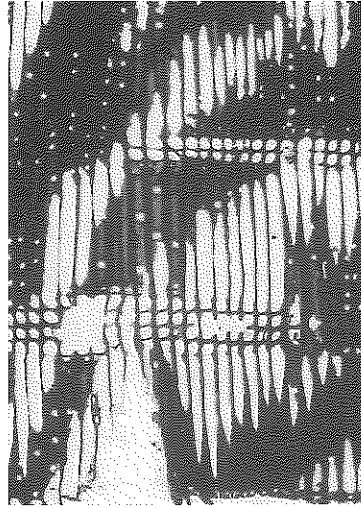
島地 謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』(雄山閣出版 1988)

島地 謙・伊東隆夫『図説木材組織』(地球社 1982)

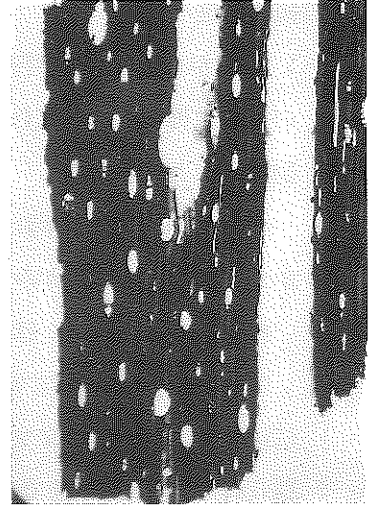
北村四郎・村田 源『原色日本植物図鑑木本編I・II』(保育社 1979)



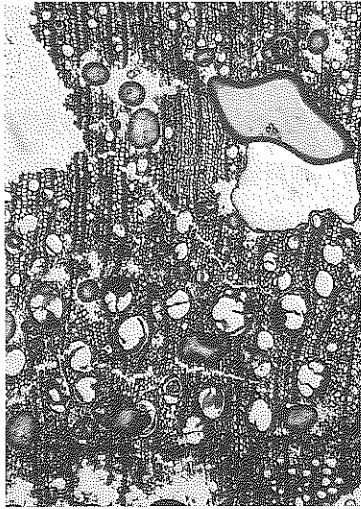
第63図 No. 2 木口 (×40)



第64図 No. 2 柁目 (×100)



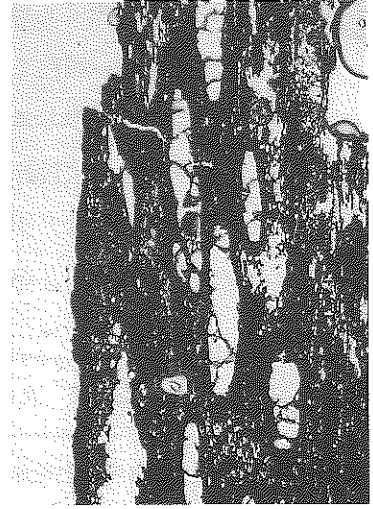
第65図 No. 2 板目 (×40)



第66図 No. 3 木口 (×40)



第67図 No. 3 柁目 (×40)



第68図 No. 3 板目 (×40)

その後の白川金色院—白川金色院の近世・近代遺物—

日本学術振興会特別研究員 中井 淳史

A. はじめに

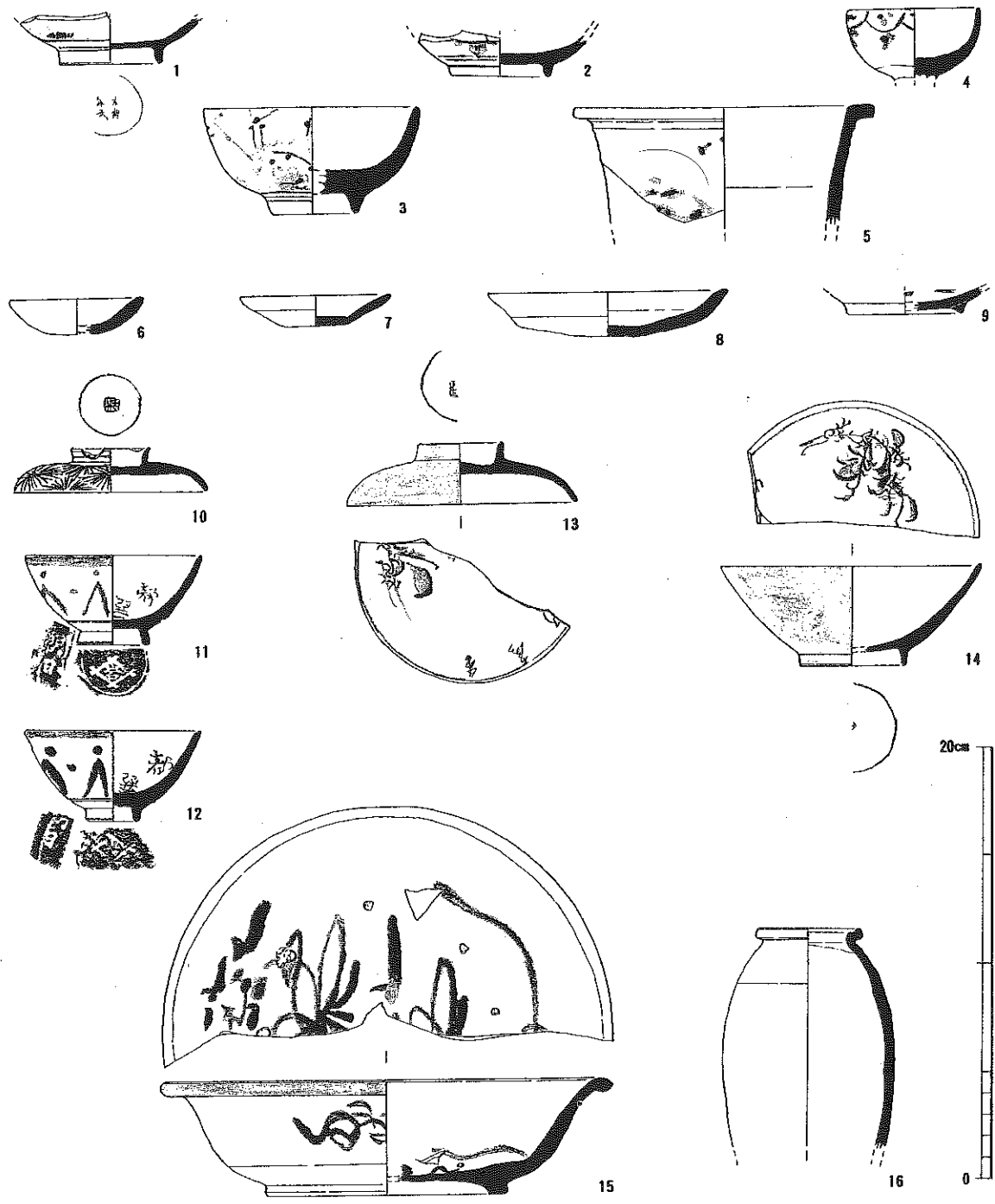
四條宮寛子が建立したという白川金色院がいつ成立し、どのような領域をもって展開を遂げたかを解明することが、本調査の目的のひとつである。目的をこのように設定した場合、いきおい古代末期から中世の状況の検討が中心になるのはやむを得ないことであるが、白川金色院の「はじまり」に目を向けることは、必然的に「おわり」への関心をも提起する。なぜなら、宗教的な空間として成立した白川金色院がどのように変貌し、白川に住む人びとによって生活空間として領有されていったかという過程もまた、歴史上の事実にはちがいないのだから。ここで近世以降の白川金色院について、たちどまって検討してみる価値はあるだろう。

ここでは断片的な資料をもとに近世以降の白川金色院の一端を素描して、今後の検討の一助としたい。なお、遺物の出土が多かった福泉坊跡と関伽井遺構を主にとりあげる。

B. 近世以降の遺物 (第69図)

福泉坊跡 福泉坊の名は、「恵心院文書」などの近世史料にたびたびみえる。伝承や絵図によると、1-1・1-2・5-1トレンチが福泉坊の敷地にあたる。このうち、5-1トレンチから出土した近世遺物を報告する(1~5)。1・2は染付碗の底部。1は底部外面に「□□年製」、高台外面には時計回りに2条の線が、体部外面下半には梅文が手描きされる。17世紀後半代と推測される。遺構面上からの出土である。2の外面にはコンニャク印判で蔦葉文が描かれる。3は厚手の丸形染付碗。いわゆるくらわんか碗とよばれる雑器である。釉は全体的に灰色に発色し、外面には緑色の釉で梅樹文を描く。18世紀後半ごろか。4は染付仏飯器。脚部以下を欠損する。全体的に釉の発色は暗く、口縁部外面に植物文(蔦か?)を描く。5は信楽焼。向付か。明赤茶色で、表面に長石粒が融け出ている。外面には明緑色と暗赤色の2色で飛梅文を描く。以上2~5はSK5104から出土した。このほか細片ではあるが、端反の染付碗や、印判手で鹿子文を外面に施した伊万里焼小皿などが出土した。前者は19世紀以降、後者は明治時代以降にみられるものである。

関伽井遺構 天明6年(1786)成立の『都名所図会拾遺』や、幕末ごろの作とみられる『白山宮之図』には、白山神社が坐す本山の北麓、現在寺川沿いに東海自然歩道が通る箇所に「関伽井」が描かれている。おなじ絵図には別の箇所に「手洗井」が描かれているから、この絵が描かれたところに、この井戸が白山社ではなく、白川金色院に関連した施設として認識されていたことはまちがいない。しかし、関伽井の名がみえるのは近世の史料や絵図のみで、それ以前の史料にはまったくみられない。関伽井遺構の成立と廃絶を、若干の遺物からあとづけてみたい(6~16)。



第69図 福泉坊跡・関伽井遺構出土遺物実測図

6～8は土師器皿。6は口径6.0cm、器高1.6cm。内外面をナデずに仕上げる。16世紀。7は口径7.0cm、器高1.4cmを測る。明茶褐色で精良な胎土である。平底で、体部が直線的にたちあがる。これは16世紀によくみられる器形であるが、口径7.0cm台のものはまれである。8は口径10.8cm、器高2.1cm。赤褐色の精良な胎土で、底部内面を一方向にナデたのち、口縁部内外面をナデる。とくに口縁部のナデはつよく、外反する。9は瓦器碗の底部。産地は不明であるが、断面三角形の高台が丁寧にはりつけられている点からみれば、13世紀代と推測される。10は染付蓋。コバルトブルーの釉で、外面前面に文様が描かれる。つまみの3カ所を外側から半月状に打ち欠き、挾

りを入れる。蓋付碗は18世紀からみられる器種であるが、釉の色からすると近代の所産である可能性もある。11・12は宇治朝日焼の小碗。口径8.0cm、器高4.2cmを測る。精良な淡茶色の胎土で、体部内外面には黄灰色の釉がかけられる。外面には濃緑色の釉で文様が描かれる。内面には同じ釉を用いて、宇治山を主題とした喜撰法師の和歌にちなんだ「都巽」の文字が書き入れられている。底部外面には井桁菱に「岩」の、体部外面下半には「朝日」の刻印がある。朝日焼窯元松林豊齋氏のご示教によれば、朝日焼九代俵屋長兵衛の印という。おおよそ19世紀後半～末に位置づけられよう。13は青磁染付蓋、14は青磁染付碗。両者は対になる。ともに体部外面に青緑色の釉がかけられ、内面は濃青色で植物文（カズラ？）が描かれる。14の口縁端部には茶褐色の鉄錆がうすく塗布される。いわゆる「口紅」であるが、塗りは均一でなく、発色も弱い。ともに18世紀後半ごろか。15は口径20.8cmを測る染付鉢。高台を削り出し、濃青色の釉で見込み部分と外面に文様を描く。見込みの5カ所に胎土目の跡がのこる。16は陶器小壺。口径4.9cm、残存高約10.0cmを測り、器壁は5mm前後と薄い。茶灰色の精良な胎土で、焼成は堅緻である。口縁部から肩部にかけての内外面に暗緑灰色の釉がうすくかかる。内面にはロクロ目が明瞭にのこる。このほか、関伽井からは江戸後期の瓦も一定量出土した（図版39）。

C. 白川金色院の「おわり」、白川金色院の「はじまり」

福泉坊 出土遺物からみて、5-1トレンチで検出された遺構群は近世以降のものと判断できる。遺物の年代は17世紀後半から19世紀後半まで幅があるが、破片も含め、18世紀後半ごろに量的なピークがみとめられる。染付類は、日常品として使用された雑器類がほとんどで、高級品とよべるようなものはない。もっともあたらしい遺物が明治時代であることを考えれば、これら遺構群の廃絶もこの時期とみてよい。福泉坊の住僧は廃仏毀釈のころに退転したというが、遺物群の年代観はこれと矛盾しない。福泉坊の廃絶は明治初頭であり、その後現在のような畑地へと改変されていったものと推測される。

関伽井 染付・陶器類（10～15）は井戸S E 5401近傍の遺構面上で、多量の貝殻（シジミ類か）と混じり合った状態で出土した。堀方は一切検出できなかったことから、食物残渣とともに不要になった食器類をそのまま廃棄したものと考えられる。朝日焼の年代観にしたがうならば、廃棄の年代はおそらく明治時代であろう。とすれば、このころには井戸としての機能は失われていたことになる。少なくとも、関伽井＝仏に供える水を汲むための井戸と特別視する観念は失われていたことはまちがいあるまい。上の資料は、関伽井の「おわり」をものがたっている。

では、関伽井の「はじまり」はいつなのだろうか。検出遺構の保存を優先する方針上、層位的に理解できるデータが得られなかったため、推測に頼るほかない。その手がかりとなるのが、滝石組（井戸S E 5401そば）の精査中に出土した1～4の資料である。瓦器碗は13世紀代、土師器は14世紀後半から16世紀の年代を示す。今のところ創建期（12世紀初頭）までさかのぼる遺物はないが、13世紀以降の遺物が発見されたことは、これら関伽井遺構（滝石組）が中世までさかのぼる可能性を示唆する。つまり、近世の文献史料にあらわれるよりはるか前に、湧水を利用した

施設が存在していた可能性が高いのである。

13世紀ごろにはすでにつくられていた井戸S E 5401が、はたして当初から閼伽井として用いられていたかは検討の余地がある（ただし三井寺の例など、立石をふくむ石組をともなった事例は存在する）。少なくとも確実にいえるのは、江戸時代にはこれが白川金色院に関連する施設とみなされ、「閼伽井」とよばれていたことである。しかし、明治初頭の廃仏毀釈で、さいごまでのこっていた福泉坊も廃絶すると、閼伽井という観念も、井戸としての機能も失われ、ゴミ捨て場として利用された。井戸は白川金色院の「記憶」からきりはなされてしまったのである。そして現代、調査前の現地は腐植土に厚く覆われた小湿地帯で、石組の遺構群は地表面からはまったくわからない状態であった。「記憶」のみならず、その痕跡さえも地中に埋もれてしまっていたのである。

白川金色院の「おわり」 白川金色院跡の調査で出土した近世遺物の量は、中世のそれと比べると圧倒的に少なく、出土地点も限定される。福泉坊跡や閼伽井遺構をのぞけば、伝蔵之坊跡（6－7・8トレンチ）や室町時代坊跡（2－1・2トレンチ）でわずかに出土するにすぎない。また、検出された遺構は耕地用の暗渠が大半で、寺院との関連性を明確に指摘できる遺構はほとんどない。もっとも現在水田となっている地区については、近世の遺構面が削平された可能性も考えなければならないが、このような遺構・遺物の偏在性はある事実を反映しているように思われる。すなわち、寺院空間として利用されていた領域が、江戸時代を境に大きく縮小したという事実である。近世史料（「白川村検地帳写」など）に名のみえる坊院の大半は、おそらく現在の宅地区域と重なりと推測されるが、2－1トレンチや6－6トレンチなどで検出された室町時代の坊院は、近世初頭に廃絶または退転し、現在のように耕地へと転換していったと考えられる（「山崎家文書」の宝暦3年（1756）2月18日「乍恐口上書」には、往古の「十六坊」が「只今三坊相残り有之、其外八悉字地面斗に罷成」とある）。白川金色院＝寺院という宗教空間は、坊院の廃絶・移動をともないつつ、徐々に人びとの生活空間へと変化していったのである。

閼伽井の「おわり」は、こうしたプロセスがどのような意識の変化を背景としていたかを知る一助となるかもしれない。江戸時代を通じて坊院の数が減少してゆくなかでもなお、白川金色院の「閼伽井」とみなされていた井戸S E 5401は、一般的な井戸の形態ではなく、滝石組や石敷通路S F 5105、小池S G 6102などをともなっていたためか、明治時代になると水源という井戸本来の役割すら失われ、ゴミ捨て場というまったく異なる役割を付与されつつ埋没していった。施設としての閼伽井が本来もっているはずの宗教的機能は、人びとのなかから忘却されていったのである。

白川金色院の「はじまり」が、寺院建立の発願という、あるひとりの貴族女性の意志にもとづいた明確なものであったとしても、その「おわり」はつねにはっきりしたかたちをとるわけではない。寺院という人工的につくられた宗教空間が、いかにして人びとにその宗教性をとりさられつつ領有されてゆくか、こうしたこともまた追究に値する課題であるように思われる。

白川金色院惣門について

京都大学大学院工学研究科助教授 山岸 常人

A. 由緒沿革

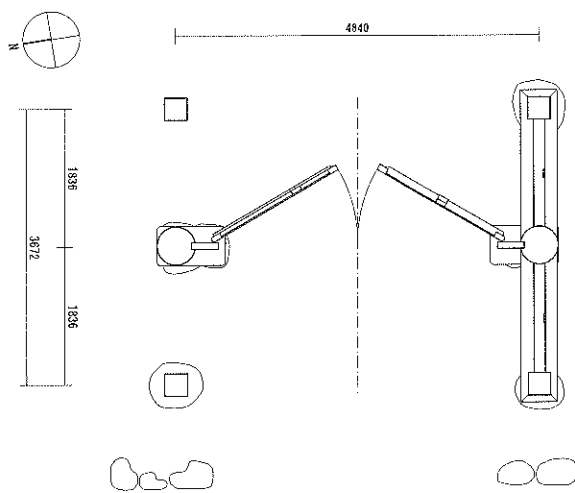
金色院惣門は、宇治市の南部、宇治川支流の白川に沿った盆地の段丘の端に立っている。この周辺は、藤原寛子の御願によって康和4年(1102)に完成した白川金色院のあった場所と推定されている。惣門の南東の山上には、建治3年(1277)建立とされる白山神社拜殿(重要文化財)が現存し、また東側の山際では平成7・8年度の発掘調査によって、文殊堂と推定される一間四面孫庇付の仏堂の遺構が検出された。近世には惣門の北東に、蔵之坊・福泉坊の2つの院坊があったことが後述の絵図などで知られる。惣門は、いわばこれら堂舎・坊院のある白川金色院の中心部に向かう道路に開く門であり、段丘の上部の寺域と、段丘下の集落を区画する施設となっている。寺域の西辺を区画する門と見ることもできる。

B. 構造形式と特色

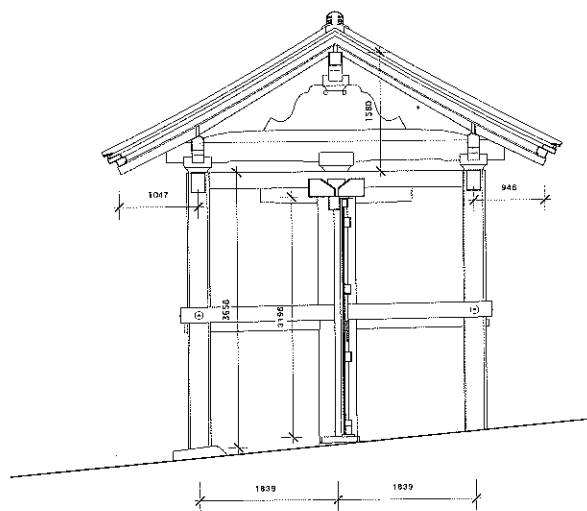
惣門の構造形式は、四脚門、切妻造、本瓦葺である。軸部は、親柱が円柱であり、これを楣・冠木で繋ぎ、柱頂部に大斗を置く。控柱は面取角柱で、頂部を頭貫で繋ぎ、柱上に大斗肘木を組んで軒桁を受ける。親柱と控柱の間の梁行は、腰貫を通し、腰長押を打ち、親柱頂部に男梁を輪雑込み、これを控柱上では頭貫として収めている。男梁の下には女梁を入れて男梁を支承する。妻飾は親柱・控柱の大斗に虹梁を組んで、板墓股を据えて、その上の大斗肘木で棟木を受ける。側



第70図 白川金色院惣門全景(西から)



第71図 白川金色院惣門平面図
(左半部礎石石口位置・右半部腰長押位置、1:100)



第72図 白川金色院惣門断面図 (1:100)

通りの中備は丈の低い間斗束、棟通りの中備は間斗束に舟肘木を組んで棟木を受ける。軒は一軒角繁垂木である。板扉は足下が簡易な唐居敷、上は冠木に軸摺穴を穿って吊っている。扉板には門が付けられている。

桁行（間口）が4.8mもある規模の大きな四脚門である。構造形式は、中世以来広く用いられた簡素な四脚門の形式に忠実に則り、装飾部材は妻飾の臺股以外に用いられておらず、至って簡明な建物である。木柄も大きいために、古雅な印象を受ける。親柱はケヤキ、控柱とその他の主要構造材は概ねマツを用いており、風触の大きい部分がある。

細部に注目すると、垂木の先端部にはかなり強い反り増しがあり、側桁の螻羽部分にも反り増しがある。

妻には破風を打たず、支外垂木の五支目が桁の端に載るだけである。螻羽の出はこの規模の門としてはやや小さい。

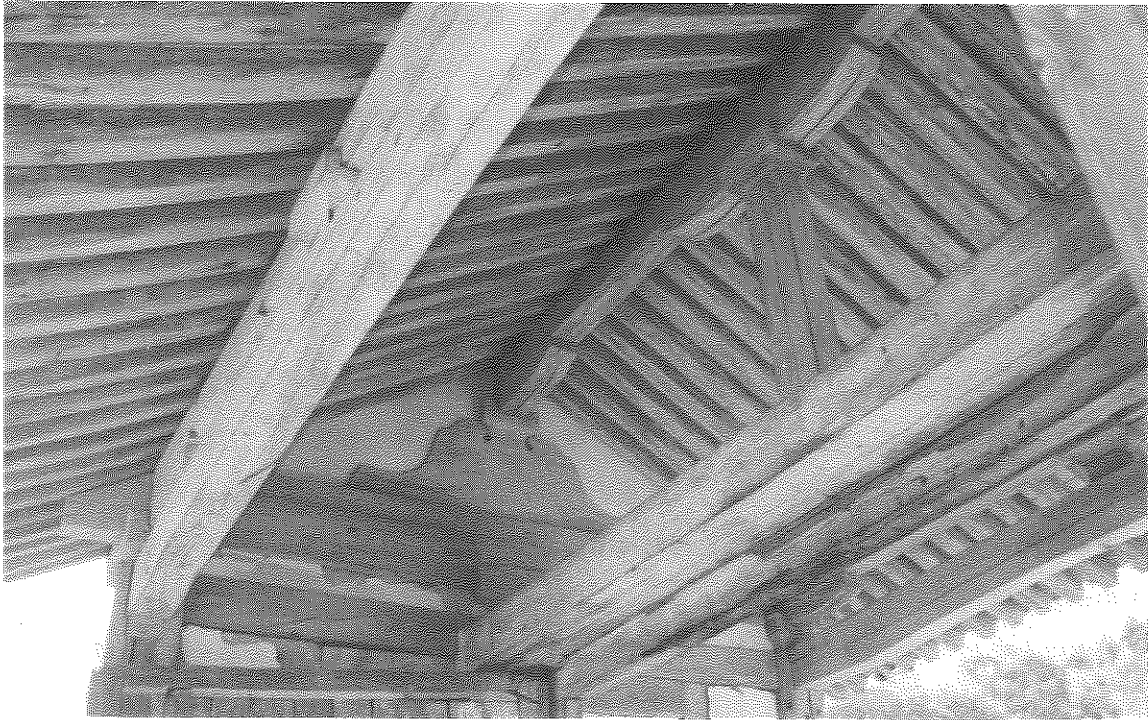
全体に朱の彩色が施されているが、風触のため概ね色あせている。



第73図 惣門側背面（南東から）



第74図 惣門西面北の螻羽（北西から）



第75図 惣門内部見上げ

C. 修理・改造の内容と復元的考察

ところで、前項に記した構造形式は、建立当初からの形式が保持されているのではなく、多少の改造の手が加えられている。

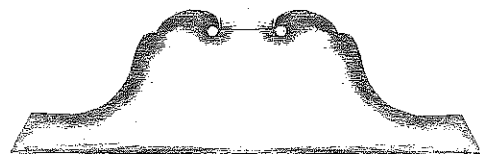
まず親柱の礎盤を兼用している唐居敷は、厚みが薄く、明らかに後補材である。親柱の外表面には、貝形が接するためのはつりがあり、また飛貫のほぞ穴の埋木もある。これらは門の南北に塀が接続していたことを示す。柱頂部には女梁・男梁を輪薙込んでいるが、北の親柱の北面のみ柱頂部が大斗尻まで伸び、その他は男梁の中程で止まって、統一がとれていない。

控柱の頭貫は、中央で反り上がって虹梁形に見えるが、正規の虹梁形ではない。この材は明らかに古い垂木などと比べると質感が異なり、後補材と認められる。

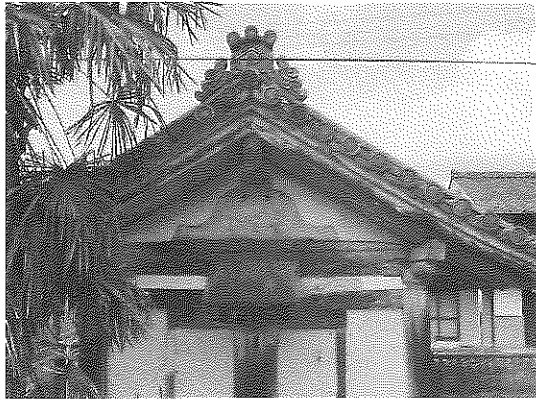
桁は正面（西）・背面（東）ともに、中備の斗の上で継がれている。いずれも北半部が古く、南半部は後補材である。北半部には木舞穴があり、舟肘木にも同様に木舞穴があって、頭貫と桁の間が土壁であったことがわかる。しかし後補材の桁には木舞穴がなく、南の舟肘木にも同様に木舞穴はない。南の舟肘木は北のそれに比べ曲線部の形状が悪く、舟肘木も後補材と見られる。桁の反り増しに関しては、東の側桁の北端は桁そのものを反り増しのある形状に造り出し、西の北端は反りだけを付け、上に矧木をして反り増しをつくる。これに対し、南端は東西共に桁そのものは直材で、上端に雑な仕事で矧木をしているに過ぎ



第76図 舟肘木当初材拓本 (1:10)



第77図 妻飾臺股拓本
(東半部の拓本を合成して作成、1:30)



第78図 妻飾（南から）

て墓股は張り付けた板に載るのではなく、板の内側に台木を置いて墓股が据えられている。台木と下半部の虹梁との接続状況は壁土に覆われて確認できない。虹梁上半部の板が当初からあったものか否かは判別できない。

垂木は大半が当初材であるが、特に桁端部のそれは4本とも新しく、おそらくは当初あったはずの破風をはずしたために補加されたと考えられる。その際、桁を切り縮めているようである。

屋根瓦は、平等院鳳凰堂の明治修理に際して作成された瓦当の瓦が使用されており、近世に遡る瓦は獅子口と棟積だけである。

以上のような改造・修理はあるが、復原しても建立当初の形態は現状と大きく変わるものではない。

D. 建立年代

建立年代を示す史料は見出されていない。諸種の史料を併せて以下のように考えることができる。

まず文献史料からは以下のことが知られる。天明8年(1788)の口上書(山崎家文書15¹)には、惣門他の建物について「往古より有来而、何より之御寄附共相知レ不申候、」とある。さらに遡って元禄5年(1692)の金色院由緒書(恵心院文書94 文書報告所収)にも惣門の存在が記されている。貞享3年(1686)刊の擁州府志には「楼門有額、然文字不分明」と記されている。楼門という記載は現状の形式とは異なるが、用語がさほど正確に用いられたわけではなかろう。ここに記された惣門または楼門が建て替えられていないとすれば、現在の惣門は貞享以前の建立となる。ただし、安永5年(1776)に金色院福泉坊が白山宮(白山神社)拜殿の修理を行い(棟札²)、延享5年(1748)・寛延2年(1749)に大般若経の修復を行う³など、18世紀後半に福泉坊が金色院の復興事業を行っており、惣門もその時期に古材を用いて再建された可能性も残される。

絵画史料からは以下のことが知られる。幕末の「白山宮之図」(上林清泉作)には現状と変わらぬ形態の切妻造、瓦葺の四脚門が描かれ、「金色院古図」(『京都府史蹟勝地調査会報告 第六冊』所収)には切妻造と推定される惣門が描かれ「梁二間、桁行二間半、惣門四ツ足」と記されている。この規模は現状とほぼ一致する。天明6年(1786)に編纂された「都名所図会」にも惣門が描かれるが、これは寄棟造の八脚門に描かれ、描写を信ずることはできない。

惣門そのものの様式・技法から見ると、江戸時代前期より古い様式を持っていると判断される。

ない。つまり当初材は一材もしくは桁木で反り増しを作るのに対し、後補材は、間に合わせの仕事で軒の反りを作っているのである。

板扉の軸は継木され、扉板も下部の約1/3は後補材である。控柱の足下の腐蝕の著しいこととも併せて、傾斜地のための土砂流入や流水による腐蝕が著しく、補修されたと考えられる。

妻の虹梁は下側に繰りのある陸梁の上面に板を貼り付けて、全体で虹梁形としたものである。従っ

垂木は反り増しがあり、中世に遡る技法ではあるが、門の場合は近世になってもこの技法が用いられることがある。一方、桁にも反り増しがあり、これは確実に中世に遡る技法であり、この門の建立が16世紀以前であることを示す。各部の風触は小さくないが、材質がマツ材であることを考慮すると、さほど古い時期の建立とはいえない。以上のような特質を総合すると、惣門は16世紀の建立と考えるのが穏当なところであろう。

しかし、前述の如く、妻飾虹梁が一材ではなく、桁の半分や控柱の頭貫が後補材であり、螻羽の出が切り縮められ、破風が撤去されている。中世末の建物を、18世紀後期ごろに修理・改修したのである。

E. 評価

建立年代も明確でなく、様々な改造・修理が行われているが、12世紀以来の歴史を持つ金色院に残された数少ない古建築であり、規模の大きな雄大な建物で、惣門と呼ばれるに相応しい風格のある建物といえよう。わずかに残った金色院の近世における実態を知る上で欠かすことのできない重要な建物である。

建立年代については、あるいは連歌師宗長が白川別所に往来した頃の造営かと推察される。院政期に創建された金色院が長い中世の歴史を経て生き長らえた姿を具体的に示す建物として、白川金色院の遺跡や、この地区の歴史を理解する上で欠かすことのできない重要な遺構といえよう。発掘調査では室町時代の遺構や遺物の検出範囲が広いので、中世後期の寺院活動の活発な状況と対応する建物と評価することができる。

院政期の文殊堂の遺跡、鎌倉時代中期の白山神社拝殿、室町後期の惣門、近世以降の農村集落や里山の景観等が相俟って、白川金色院の900年の歴史を体験できる空間として、この建物とその周辺の地域が良好に保全されていくことが望まれる。

F. 史料

惣門の西に立つ石燈籠の刻銘は以下の通りである。惣門の建立とは直接関係がないが、金色院の蔵之坊・福泉坊の活動の下限を示す史料として注目される。

・北燈籠刻銘	竿西面（正面）「白山宮」	・南燈籠刻銘	竿西面（正面）「白山宮」
	竿北面 「蔵之坊」		竿北面 「福泉坊」
	竿南面 「福泉坊」		竿南面 「蔵之坊」
	竿東面 「弘化三丙午年六月」		竿東面 「弘化三丙午年六月」
	基壇三段目東面「寄進		基壇三段目東面「世話方
	上林三入		氏子中
	岡本市右工門		古川輿兵衛
	天王寺屋三良兵工		服部利右衛門
	籠屋久五良		村田新治郎
	瓦屋源左工門」		石工
			伏見住
			中谷清兵衛」

【註】

- 1 収蔵文書調査報告1『「白川金色院」と恵心院』（宇治市歴史資料館 平成10年3月）所収。以下文書報告と略記する。
- 2 『社寺の国宝・重文等 棟札銘文修正—近畿編—』（国立歴史民俗博物館 平成8年3月）。
- 3 文書報告14頁。

【参考文献】

宇治市役所編『宇治市史』1（昭和48年1月）

宇治市歴史資料館『「白川金色院」と恵心院』（平成10年3月）

京都府編『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊（大正14年5月）

京都府文化財保護基金編『京都の社寺建築 南山城編』（昭和58年8月）

国立歴史民俗博物館編『社寺の国宝・重文等 棟札銘文集成—近畿編—』（平成8年3月）

出土遺物一覽表 (図版)

軒瓦

図版番号	写真図版	遺物番号	名 称	トレンチ	備 考
35	48	1	軒丸瓦	6-6	
35	48	2	軒丸瓦	7-13	
35	48	3	軒丸瓦	6-6	
35	48	4	軒丸瓦	4-1	
35	48	5	軒丸瓦	6-6	
35	48	6	軒丸瓦	1-1	
35		7	軒丸瓦	8-4	
35	49	8	軒丸瓦	7-11	
35	49	9	軒丸瓦	6-6	
35	49	10	軒丸瓦	4-6	
36	49	11	軒丸瓦	5-1	
36		12	軒丸瓦	4-6	
36	49	13	軒丸瓦	5-4	
36	49	14	軒丸瓦	4-6	
36	50	15	軒丸瓦	1-1	
36	50	16	軒丸瓦	4-1	
36	50	17	軒丸瓦	1-1	
36	50	18	軒丸瓦	3-3	
36	50	19	軒丸瓦	3-3	
36	50	20	軒丸瓦	1-1	
36	53	21	軒丸瓦	1-1	
36	53	22	軒丸瓦	1-1	
37	51	23	軒平瓦	9-1	
37	51	24	軒平瓦	4-6	
37	51	25	軒平瓦	4-6	
37	51	26	軒平瓦	5-1	
37	51	27	軒平瓦	1-1	
37		28	軒平瓦	1-1	
37	51	29	軒平瓦	1-1	
37	51	30	軒平瓦	4-1	
37	52	31	軒平瓦	4-1	
37	52	32	軒平瓦	5-4	
37	52	33	軒平瓦	惣門下	管理設時
37	52	34	軒平瓦	5-4	
37	52	35	軒平瓦	5-4	
37	52	36	軒平瓦	6-3	
37	52	37	軒平瓦	4-6	
38	53	38	軒平瓦	4-6	
38	53	39	軒平瓦	4-6	
38	53	40	軒平瓦	7-15	
38	53	41	軒平瓦	4-1	
38	53	42	軒平瓦	4-1	
38	53	43	軒平瓦	4-1	
38		44	軒平瓦	3-3	
38	53	45	軒平瓦	3-3	
38		46	軒平瓦	3-3	
38		47	軒平瓦	6-6	
38	53	48	軒平瓦	1-1	
38	53	49	軒平瓦	4-2	
38	53	50	軒平瓦	3-4	
38	53	51	軒平瓦	4-1	

38	53	52	軒棧瓦	2-2	
39		53	軒丸瓦	5-4	
39		54	軒丸瓦	5-4	
39		55	軒丸瓦	5-4	
39		56	軒丸瓦	5-4	
39		57	軒棧瓦	5-4	
39		58	軒棧瓦	5-4	
39		59	軒棧瓦	5-4	
39		60	軒棧瓦	5-4	
39		61	軒棧瓦	5-4	

土器

図版番号	写真図版	遺物番号	名 称	トレンチ	備 考
40		1	土師器皿	1-1	
40		2	土師器皿	1-1	
40		3	土師器皿	1-1	
40		4	土師器皿	1-1	
40	54	5	土師器皿	1-1	
40		6	土師器皿	1-1	
40		7	土師器皿	1-1	
40	54	8	土師器皿	1-1	
40		9	土師器皿	1-1	
40	54	10	土師器皿	1-1	
40	54	11	土師器皿	1-1	
40		12	土師器皿	1-1	
40	54	13	土師器皿	1-1	
40	54	14	土師器皿	1-1	
40		15	土師器皿	1-1	
40		16	土師器皿	1-1	
40		17	土師器皿	1-1	
40		18	土師器皿	1-1	
40	54	19	土師器皿	1-1	
40		20	土師器皿	1-1	
40		21	土師器皿	1-1	
40	54	22	土師器皿	1-1	
40	54	23	土師器皿	1-1	
40		24	土師器皿	1-1	
40	54	25	土師器皿	1-1	
40		26	土師器皿	1-1	
40	54	27	土師器皿	1-1	
40		28	土師器皿	1-1	
40	54	29	土師器皿	1-1	
40		30	土師器皿	1-1	
40		31	土師器皿	1-1	
40		32	土師器皿	1-1	
40	54	33	土師器皿	1-1	
40		34	土師器皿	1-1	
40		35	土師器皿	3-4	
40		36	土師器皿	3-4	
40		37	土師器皿	3-4	
40		38	土師器皿	3-4	
40		39	土師器皿	3-4	
40		40	土師器皿	3-4	

40		41	土師器皿	3-4
40		42	土師器皿	4-1
40		43	土師器皿	4-1
40		44	土師器皿	4-3
40		45	土師器皿	4-3
40		46	土師器皿	4-3
40		47	土師器皿	4-3
40		48	土師器皿	4-3
40		49	土師器皿	4-4
40		50	土師器皿	4-4
40		51	土師器皿	4-6
40		52	土師器皿	4-6
40		53	土師器皿	4-6
40		54	土師器皿	4-6
40		55	土師器皿	4-6
40		56	土師器皿	4-6
41		57	土師器皿	6-3
41		58	土師器皿	6-3
41		59	土師器皿	6-3
41		60	土師器皿	6-3
41		61	土師器皿	6-3
41	54	62	土師器皿	6-3
41	54	63	土師器皿	6-3
41		64	土師器皿	6-3
41		65	土師器皿	6-3
41		66	土師器皿	6-3
41		67	土師器皿	6-3
41	54	68	土師器皿	6-3
41		69	土師器皿	6-3
41		70	土師器皿	6-3
41		71	土師器皿	6-3
41		72	土師器皿	6-3
41		73	土師器皿	6-3
41	54	74	土師器皿	6-6
41	54	75	土師器皿	6-6
41	54	76	土師器皿	6-6
41	54	77	土師器皿	6-6
41	54	78	土師器皿	6-6
41		79	土師器皿	6-6
41		80	土師器皿	6-6
41	54	81	土師器台付皿	6-6
41	54	82	土師器皿	6-6
41		83	土師器皿	6-6
41		84	土師器皿	6-6
41		85	土師器皿	6-6
41		86	土師器皿	6-6
41		87	土師器皿	6-6
41	55	88	土師器皿	6-8
41	55	89	土師器皿	6-8
41	55	90	土師器皿	6-8
41	55	91	土師器皿	6-8
41		92	土師器皿	6-8
41	55	93	土師器皿	6-8
41	55	94	土師器皿	6-8
41	55	95	土師器皿	6-8

41		96	土師器皿	6-8
41		97	土師器皿	6-8
41		98	土師器皿	6-8
41	55	99	土師器皿	6-8
41		100	土師器皿	6-8
41	55	101	土師器皿	6-8
41	55	102	土師器皿	6-8
41		103	土師器皿	6-8
41	55	104	土師器皿	6-8
42		105	土師器皿	7-11
42		106	土師器皿	7-11
42		107	土師器皿	7-11
42	55	108	土師器皿	7-11
42	55	109	土師器皿	7-11
42	55	110	土師器皿	7-11
42		111	土師器皿	7-11
42	55	112	土師器皿	7-11
42	55	113	土師器皿	7-11
42	55	114	土師器皿	7-11
42	55	115	土師器皿	7-11
42		116	土師器皿	7-11
42	55	117	土師器皿	7-11
42	55	118	土師器皿	7-11
42		119	土師器皿	7-11
42		120	土師器皿	7-12
42		121	土師器皿	7-12
42		122	土師器皿	7-12
42	55	123	土師器皿	7-12
42	55	124	土師器皿	7-13
42	55	125	土師器皿	7-13
42	55	126	土師器皿	7-13
42		127	土師器皿	7-15
42		128	土師器皿	8-9
42	56	129	土師器皿	9-7
42	56	130	土師器皿	9-7
42	56	131	土師器皿	9-7
42	56	132	土師器皿	9-7
42	56	133	土師器皿	9-7
42	56	134	土師器皿	9-7
42	56	135	土師器皿	9-7
42	56	136	土師器皿	9-8
42	56	137	土師器皿	9-7
42	56	138	土師器皿	9-1
42	56	139	土師質羽釜	6-8
42	56	140	土師質鍋	1-1
42	56	141	土師質羽釜	1-1
42	56	142	土師質羽釜	9-7
42	62	143	土製小壺	7-15
42		144	ミニチュア羽釜	7-13
43		145	瓦器皿	1-1
43		146	瓦器皿	6-6
43	57	147	瓦器皿	6-6
43	57	148	瓦器皿	6-6
43	57	149	瓦器皿	6-3
43		150	瓦器小椀	5-4

43	57	151	瓦器小椀	6-6	
43	57	152	瓦器小椀	3-4	
43		153	瓦器椀	9-7	
43	57	154	瓦器椀	6-6	
43		155	瓦器椀	6-6	
43		156	瓦器椀	1-1	
43		157	瓦器椀	1-1	
43		158	瓦器椀	7-7	
43	57	159	瓦器椀	6-8	
43		160	瓦器椀	7-11	
43	57	161	瓦質高杯	7-15	
43	57	162	瓦質浅鉢	9-7	
43	57	163	瓦質浅鉢	4-6	
43	57	164	瓦質羽釜	1-1	
43	57	165	瓦質羽釜	9-7	
43	57	166	瓦質羽釜	7-11	
43	57	167	瓦質羽釜	9-7	
43	57	168	瓦質土器	7-15	
43	57	169	瓦質浅鉢	7-11	
44	57	170	瓦質浅鉢	7-15	
44	59	171	須恵器すり鉢	7-12	
44	59	172	須恵器すり鉢	6-6	
44	59	173	須恵器すり鉢	8-5	
44		174	須恵質小皿	8-9	
44	59	175	山皿	6-6	
44	59	176	山茶椀	9-11	
44	59	177	渥美産陶器壺	6-3	
44	59	178	灰釉陶器深椀	6-6	
44	59	179	須恵器鉢	6-6	
44	59	180	瀬戸小皿	9-7	
44	59	181	瀬戸折皿	7-12	
44		182	瀬戸小皿	1-1	
44	59	183	古瀬戸椀	7-11	
44	59	184	陶器椀	9-7	
44	59	185	陶器	9-7	
44	59	186	志野椀?	7-15	
44	59	187	信楽焼すり鉢	9-7	
45	59	188	備前鉢?	2-2	
45	59	189	信楽焼すり鉢	7-15	
45	59	190	瀬戸美濃天目茶椀	9-7	
45	59	191	瀬戸美濃天目茶椀	9-3	
45	59	192	瀬戸美濃天目茶椀	7-13	
45	61	193	青磁皿	2-2	
45	61	194	青磁皿	7-8	
45	61	195	青磁小椀	7-15	
45	61	196	青磁鉢	8-5	
45	61	197	青磁碗	8-25	
45	61	198	青磁碗	9-2	
45	61	199	青磁碗	1-1	
45	61	200	青磁碗	1-1	
45	61	201	青磁碗	9-7	
45	61	202	青磁碗	1-1	
45	61	203	青磁碗	6-8	
45	61	204	青磁碗	7-11	
45	61	205	青磁香炉?	2-2	

45	61	206	青磁碗	8-25	
45	60	207	白磁皿	6-6	
45	60	208	白磁皿	6-6	
45	60	209	白磁皿	6-6	
45	60	210	白磁皿	6-6	
45	60	211	白磁	1-1	
45		212	白磁碗	4-1	
45	60	213	白磁碗	6-6	
45	60	214	白磁碗	6-6	
45	60	215	白磁碗	1-1	
45	60	216	白磁碗	6-3	
45	60	217	白磁碗	9-7	
45	60	218	白磁碗?	2-1	

石製品

図版番号	写真図版	遺物番号	名称	トレンチ	備考
46	62	1	滑石製石鍋	1-1	
46	62	2	滑石製石鍋	1-1	
46	62	3	滑石製石製品 (石鍋再加工品)	1-1	
46	62	4	滑石製石製品 (石鍋再加工品)	6-6	
46	62	5	滑石製石製品 (石鍋再加工品)	6-6	
46		6	滑石製石製品 (石鍋再加工品)	6-6	
46	62	7	滑石製石製品 (石鍋再加工品)	6-6	
46	62	8	滑石製石製品 (石鍋再加工品)	6-6	
46	62	9	滑石製石製品 (石鍋再加工品)	6-6	
46	62	10	滑石製石製品 (石鍋再加工品)	6-6	
46	62	11	滑石製石製品 (石鍋再加工品)	6-6	
46		12	滑石製石製品 (石鍋再加工品)	6-6	
46	62	13	滑石製石製品 (石鍋再加工品)	6-6	
46	62	14	滑石製石鍋 (石鍋再加工品)	6-6	
46	62	15	滑石製石鍋 (石鍋再加工品)	6-6	
46	62	16	滑石製石鍋 (石鍋再加工品)	6-6	
46	62	17	滑石製石鍋	6-6	
47	62	18	砥石	1-1	
47	62	19	砥石	1-1	
47		20	砥石	7-11	
47	62	21	不明石英製品	4-1	
47	58	22	石塔	2-1	
47	62	23	茶臼	7-13	

金属製品・漆器他

図版番号	写真図版	遺物番号	名称	トレンチ	備考
47	62	1	漆器椀	1-1	
47	62	2	土鈴	2-1	
47	62	3	土人形(鶏)	2-1	
47	62	4	鞆羽口	3-1	
47	62	5	針状製品(青銅製)	1-1	
47		6	鏡(鉄製)	4-3	
47		7	不明鉄製品	4-3	
47		8	鉄釘	4-1	
47		9	鉄釘	4-1	
47		10	鉄釘	4-1	
47		11	鉄釘	4-1	
47		12	鉄釘	4-6	

経塚関連遺物

図版番号	写真図版	遺物番号	名称	トレンチ	備考
48	63	1	和鏡(青銅製)	5-5	
48	64	2	和鏡(白銅製)	5-5	
49	65	3	青白磁合子	5-5	
49	65	4	青白磁小壺	5-5	
49		5	漆製品	5-5	
49		6	漆製品	5-5	
49	67	7	毛抜き(鉄製)	5-5	
49	66	8	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	9	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	10	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	11	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	12	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	13	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	14	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	15	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	16	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	17	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	18	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	19	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	20	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	21	数珠玉(木製)	5-5	
49	66	22	数珠玉(木製)	5-5	
49		23	数珠玉(木製)	5-5	
49		24	数珠玉(木製)	5-5	
49	67	25	小玉(鉛ガラス製)	5-5	
49	66	26	青銅製品(瓔珞?)	5-5	
49	66	27	青銅製品(瓔珞?)	5-5	
49	66	28	銭貨	5-5	
49	68	29	鉄釘	5-5	
49	68	30	鉄釘	5-5	
49	68	31	鉄釘	5-5	
49	68	32	鉄釘	5-5	
49	68	33	鉄釘	5-5	
49	68	34	鉄釘	5-5	
49	68	35	鉄釘	5-5	
49	68	36	鉄釘	5-5	

49	68	37	鉄釘	5-5	
49	68	38	鉄釘	5-5	
49	68	39	鉄釘	5-5	
49	68	40	鉄釘	5-5	
49	68	41	鉄釘	5-5	
49	68	42	鉄釘	5-5	
49	68	43	鉄釘	5-5	
49	68	44	鉄釘	5-5	
49	68	45	鉄釘	5-5	
49	68	46	鉄釘	5-5	
49	68	47	鉄釘	5-5	
50		48	小玉(鉛ガラス製)	5-5	
50		49	小玉(鉛ガラス製)	5-5	
50		50	小玉(鉛ガラス製)	5-5	
50		51	小玉(鉛ガラス製)	5-5	
50	69	52	銭貨	5-5	
50	69	53	銭貨	5-5	
50	69	54	銭貨	5-5	
50	69	55	銭貨	5-5	
50	69	56	銭貨	5-5	
50	69	57	銭貨	5-5	
50	69	58	銭貨	5-5	
50	69	59	銭貨	5-5	
50	69	60	銭貨	5-5	
50	69	61	銭貨	5-5	
50	69	62	銭貨	5-5	
50	69	63	銭貨	5-5	
50	69	64	銭貨	5-5	
50	69	65	銭貨	5-5	
50	69	66	銭貨	5-5	
50	69	67	銭貨	5-5	
50	69	68	銭貨	5-5	
50	68	69	青白磁合子	5-5	
50	70	70	瓦器皿	5-5	
50	70	71	不明土製品	5-5	
50	70	72	不明土製品	5-5	
50		73	不明土製品	5-5	
50	70	74	瓦質経筒外容器	5-5	
50	70	75	青白磁小壺	5-5	
50	70	76	青白磁小壺	5-5	
50	69	77	渥美産経筒外容器	5-5	
50	70	78	平瓦	5-5	

地鎮関連遺物

図版番号	写真図版	遺物番号	名称	トレンチ	備考
51		1	土師器皿	4-1	
51	71	2	土師器皿	4-1	
51	71	3	土師器皿	4-1	
51	71	4	土師器皿	4-1	
51	71	5	土師器皿	4-1	
51	71	6	土師器皿	4-1	
51	71	7	土師器皿	4-1	
51	71	8	土師器皿	4-1	
51		9	土師器皿	4-1	

出土遺物一覽表 (挿図)

51		10	土師器皿	4-1	
51	71	11	土師器皿	4-1	
51		12	土師器皿	4-1	
51	71	13	土師器皿	4-1	
51		14	土師器皿	4-1	
51	71	15	土師器皿	4-1	
51	71	16	土師器皿	4-1	
51		17	土師器皿	4-1	
51	71	18	土師器皿	4-1	
51		19	土師器皿	4-1	
51	71	20	瓦器皿	4-1	
51	71	21	短刀	4-1	
51	72	22	土師器皿	4-3	
51	72	23	土師器皿	4-3	
51	72	24	土師器皿	4-3	
51		25	土師器皿	4-3	
51		26	土師器皿	4-3	
51	72	27	土師器皿	4-3	
51	72	28	土師器皿	4-3	
51	72	29	土師器皿	4-3	
51	72	30	土師器皿	4-3	
51	72	31	土師器皿	4-3	
51	72	32	瓦器小椀	4-3	
51	72	33	土師器皿	4-3	
51	72	34	土師器皿	4-3	
51	72	35	土師器皿	4-3	
51	72	36	土師器皿	4-3	
51	72	37	土師器皿	4-3	
51	72	38	土師器皿	4-3	
51	72	39	土師器皿	4-3	
51	72	40	土師器皿	4-3	
51	72	41	土師器皿	4-3	
51	72	42	土師器皿	4-3	
51	72	43	土師器皿	4-3	
51		44	土師器皿	4-3	
51		45	土師器皿	4-3	
51		46	土師器皿	4-3	
51		47	鉄釘	4-3	

図版 番号	写真 図版	遺物 番号	名 称	トレンチ	備 考
42			鬼瓦	1-1	
43			軒平瓦		
44	61	1	灯明皿(近世陶器)	2-1	
44	61	2	灯明皿(近世陶器)	2-1	
44	61	3	近世磁器碗	2-1	
44	61	4	近世磁器碗	2-1	
44	61	5	近世磁器碗	2-1	
44	61	6	近世磁器碗	2-1	
44	61	7	近世磁器碗	4-1	
44	61	8	近世磁器碗	7-15	
45	71		瓦経	5-1	
46	73	1	緑釉陶器小椀	6-6	
46	73	2	須恵器瓶子	7-9	
46	73	3	須恵器杯蓋	8-9	
47			土師器皿	4-1	

白川金色院関係略年表

西 曆	元 号	事 項
720	養老 4	この年、「白河寺（金色院）」が越智泰澄上人・昭澄上人によって開基されたと伝えられる。 (興福寺官務牒疏)
1102	康和 4	四条宮寛子が、白川別所金色院の落慶供養を行ったという。 (地藏院文書)
1146	久安 2	この年、白川の白山権現社が創建されたとされる。 (同社棟札)
1154 ～1161	仁平 4 ～永暦 2	意聖房順源・成熟房・文教房が白川別所にて経典を書写する。 (増壹阿含経・優婆塞戒経・雜阿含経 舍利弗阿毗曇論・正法念處経奥書)
1204	元久 1	九条良経が、宜秋門院任子らとともに平等院へ参詣し、良経は白川別所を訪れる。 (明月記)
1266	文永 3	白川と称した藤原公親が、白川別所金色院惣門の扁額を書く。 (扁額裏墨書銘)
1277	建治 3	この年、白山神社拝殿の補修が行われる。 (拝殿棟札)
1305	嘉元 3	この年、白川辻坊で大般若経が書写される。 (龍雲寺藏大般若経奥書)
1336	建武 3	白川金色院の梵鐘が製作される。 (同鐘銘・尾崎坊重孝家文書)
1460	長祿 4	「白川別所金色院勧進状」によれば、この日、金色院が盗火によって焼失したと伝えられる。 (地藏院文書)
1463	寛正 4	長祿 4 年（1460）に焼失した白川別所金色院再興の勧進が始まる。 (地藏院文書)
1467	応仁 1	近衛房嗣・政家父子らが、報恩院有玄僧正以下をともない、白川別所を訪れて所々の庭を見物する。 (後法興院記)

1470	文明 2	宇治木幡・山科・水牧を西軍の大内政弘が制圧したため、東軍方の宇治大路氏ほか細川方被官12人が降参し、16人は当地を退去、そのうち真木島氏は白川別所に籠る。 (大乘院寺社雑事記・経覚私要鈔)
1489	延徳 1	白川別所東円坊が、「西アマ寺縄東」の田地一反を、一ノ坂三郎次郎より購入する。 (田中忠三郎氏所蔵文書)
1493	明応 2	白川別所東円坊範忠が、伊勢田郷「西アサ寺縄東」の田地一反を同郷北河彦次郎に売却する。 (田中忠三郎氏所蔵文書)
1494	明応 3	宇治郷と白川別所の住民が争い、宇治郷民が白川の民家及び寺坊に放火して双方に多数の死傷者を出す。 (後法興院記)
1523	大永 3	白川別所辻坊が、連歌師宗長のもとに梅漬・柳酒などを贈り3月には、宗長が辻坊を訪問して連歌会を催す。 (宗長日記)
1524	大永 4	伏見津より船で宇治川を上り白川別所辻坊を訪ねる宗長が、その舟中で、尺八・笛を鳴らし「宇治の川瀬の水車」の流行小歌に詠い興じる人々を見聞する。 (宗長日記)
1526	大永 6	白川辻坊で宿泊していた宗長が、この日、東雲軒らと連歌会を催し翌日、迎いの船により槇島に遊ぶ。 (宗長日記)
1557	弘治 3	このころ、白川地藏院が開創されたという。 (久世郡寺院明細帳)
1587	天正15	興福寺多聞院英俊が、白川別所蔵坊に使者を派遣して茶を買い求める。 (多聞院日記)
1611	慶長16	尾崎坊の230石を筆頭に西ノ坊・東坊・文珠院・北坊・向坊・福泉坊・くらの坊・岡坊・池坊・玄勝坊・浦坊・玄真坊・梅坊の坊名を冠する人たちが作人名としてみられる。 (白川村検地帳写)

1615	元和 1	<p>上林政信に対し、宇治郷のうち220石、小倉村のうち62石余、合計282石余の知行宛行状が將軍から与えられ、27日には白川蔵之坊に対しても、小倉村のうち30石の知行が許される。</p> <p>(上林又兵衛家文書・寛政重修諸家譜・ 上林味ト家文書・譜牒余録・朱印帳)</p>
1669	寛文 9	<p>この年、白川金色院北坊に、禅宗の僧が入る。</p> <p>(上林家前代記録)</p>
1678	延宝 6	<p>茶師尾崎紹閑が白川金色院文殊堂に金銅華鬘を寄進する。</p> <p>(華鬘銘文)</p>
1750	寛延 3	<p>白川村の八尾之助らが金色院中之坊の再興を願い出たが、福泉坊・蔵之坊がその再興に反対する。</p> <p>(山崎秀雄家文書)</p>
1766	明和 3	<p>すでに3坊(北之坊・福泉坊・蔵之坊)のみとなった各坊の有様がみえる。</p> <p>(庄屋・年寄等訴状写)</p>
1776	安永 5	<p>白川神社の拜殿が修復される。</p> <p>(棟札)</p>
1818	文政 1	<p>この年、白川金色院で開帳が行われる。</p> <p>(上林春松家文書)</p>
1825	文政 8	<p>白川金色院辻之坊跡を同村新次郎が購入する。</p> <p>(府立資料館文書)</p>
1854	安政 1	<p>白川蔵之坊の良光らが、山林の伐採をめぐって、白川村を相手に訴訟を起こす。</p> <p>(白川地蔵院文書)</p> <p>この年、恵心院が白川蔵之坊を兼帯し、白川村が祈祷料として毎年銀600匁の冥加金を恵心院に支払う。</p> <p>(社寺上地一件綴)</p> <p>明治初年の廃仏毀釈により白山神社・九重石塔・惣門などを残して廃寺となる。</p>

抄 録

ふりがな	しらかわこんじきいんあとはくつちようさほうこくしょ							
書名	白川金色院跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宇治市文化財調査報告							
シリーズ番号	第6冊							
編著者名	荒川 史・浜中邦弘・中井淳史・西田倫子・清水梨代・本吉恵理子・山岸常人							
編集機関	宇治市歴史資料館							
所在地	〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
白川金色院跡	宇治市白川宮の前・宮の後、川下・川上り谷・娑婆山・東山・鍋倉山・種田・上明	26204	10	34° 52' 28"	135° 48' 55"	1993 ～ 2003	2,680m ²	内容・範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
白川金色院跡	寺院	平安時代後期 ～ 江戸時代	一間四面堂跡・礎石建物・主殿造建物・閼伽井跡・園池跡・地鎮関連遺構・経塚関連遺構・溝・土壇・柱穴	土師器・須恵器・瓦(軒丸・軒平・丸・平・鬼)・瓦器・国産陶磁器・輸入陶磁器・石製品・漆器・小刀・和鏡・金箔・木製数珠・ガラス小玉・銭貨	1993年度から2002年度までの計10カ年にわたる調査成果の総合報告			

